



明和九年壬辰正月

書林

江戸日本橋三丁目

前川六左衛門

大坂心齋橋北結

和泉屋卯兵衛

京都堀川通仏光寺下町

錢屋七郎兵衛

同 御幸町通御池下町

菱屋孫兵衛

人乃見たり言傳人高き事には金あるを聞て
あはれむも理とせしむるを先好の意を
忠孝より書りしるはむるがことなるもの
之行を高き字にけり禮のふりしるを其
佐よぶ家乃子供るなり是く夜水の仰と
ふさしむる耳

宝曆丁丑云 洛下

岩恒光定

此の書は岩恒光定の手書なり
宝曆丁丑の年洛下に於て
書かれたるものなり

凡商人カ家業を代に傳へる子に心をいれしめて
亦ろ諸事も用事をよくおこなふの得意を大
する人よく守くわて家業を傳へる者なり
仁家の教をもんり父母孝行をなす
妻子とも親戚なりとて守く上を教
ふ身と稱する者いふ代小者と稱する者
家内よくおし儉約をす先祖の家の名を
いさめん由縁の負ふを承ふ身とて父母の
けがれをけしきとて此一を承ふ者なりとて
賢と

てふさうくもいふはなれどもいふはなれども
さう人に代るまゝにやうなまゝにやうなまゝに
さうさういふはなれどもいふはなれども

○ 万葉集のさういふはなれどもいふはなれども
さういふはなれどもいふはなれども
さういふはなれどもいふはなれども
さういふはなれどもいふはなれども
さういふはなれどもいふはなれども

高人生業鑑卷之五終 大尾

目かき書とて身之細のあやうく先をうへて老より

しざしとらうとらう

○

酒の結構うらよきものねども多くさきと病を

けづるまのともをさきえもくくうら研てと

りまもあふとせん境のきねまやもわりあ

○

あしあきの車くるま段あふつあつともうら酒よりた入

をさぐさ付人さうどくくそは個くとも物まああせいとあさ

○

うくくえんまがあふとくくくくくくくくくく

あふく増しくあふとくくくくくくくくくく

○

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

うくくく人中そくくくくくくくくくくくくく

やうの残^{やう}あまねをてん^{てん}月^{げつ}と不^ふ世^せの酒^{さけ}と飲^のべ上^う
もろれたおもひをいふ^{いふ}妙^{めう}睡^{すい}く^く子^こ依^いの身^みを
は^は何^{なん}う不^ふ足^{そく}うく二^に季^きの極^{ごく}も別^{べつ}よをばし
う^う考^{かう}る少^{せう}の^の花^{はな}の夢^{ゆめ}う^うと^と林^{りん}とさ^さく^くる
を^を休^{やす}み秋^{あき}を^を紅^{こう}ふ^ふ乃^のか^かげよ^よう^うの^のな^なを^をの^の物^{もの}を
あ^あま^ませ^せう^うう^う第^{だい}佳^け美^みの^のな^なを^をあ^あく^く秘^ひに^に全^{ぜん}球^{きゅう}の^の
う^うの^の物^{もの}を^をう^うく^く何^{なん}まも^もう^うか^かき^きあ^あう^うく^く世^よ代^{だい}
家^け依^いう^うく^くこ^こを^を從^{じゆ}方^{ほう}こ^こを^を樂^{たの}ま^まう^うく^く
と^とい^いふ^ふま^まに^に人^{ひと}の^の相^{さう}者^{じや}感^{かん}入^いは^はま^まう^うく^く
お^おわ^わる^る福^{ふく}個^こう^うく^くと^とい^いふ^ふう^うく^く

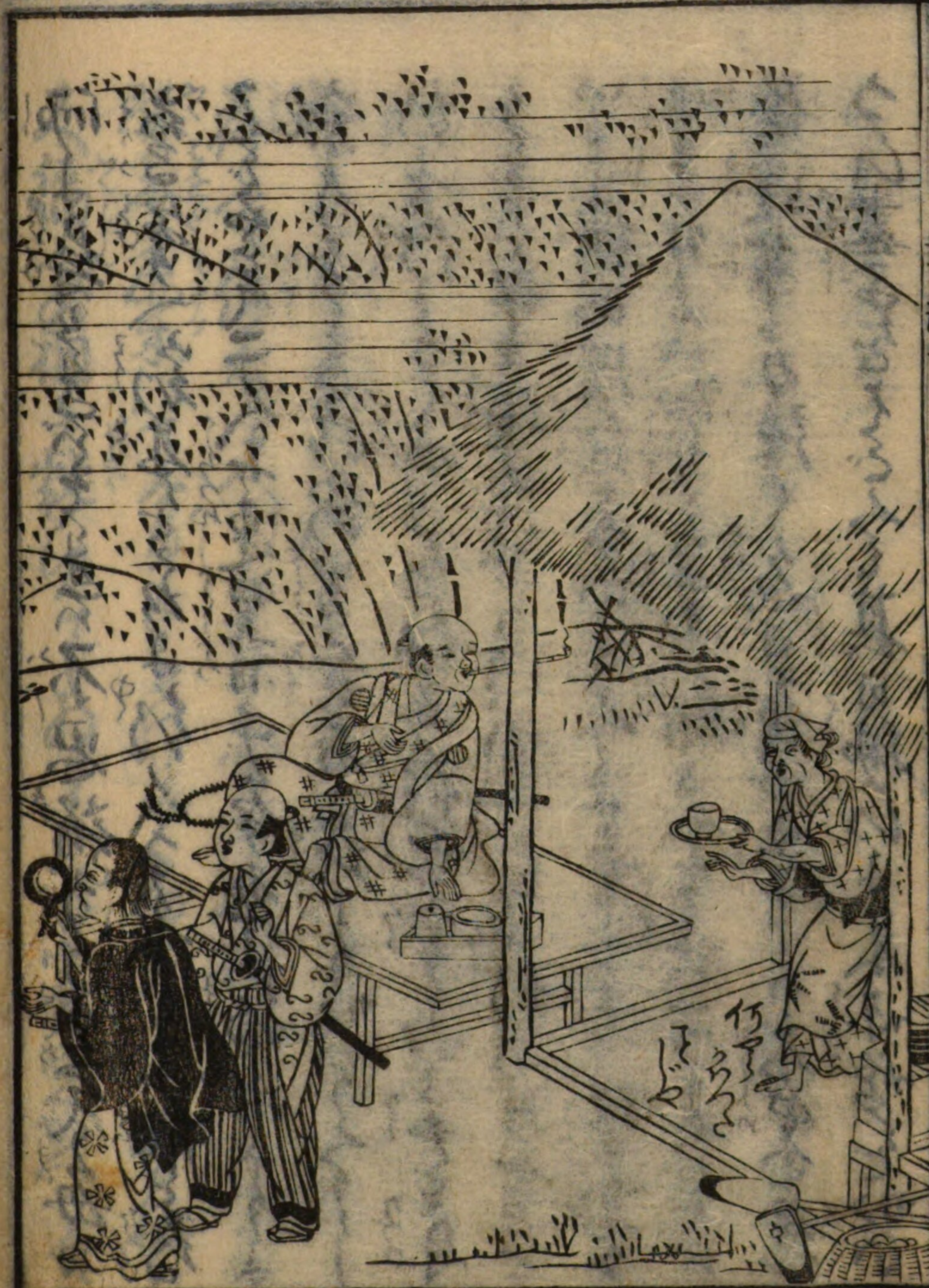


あやめ
こぎり
まき
あやめ
こぎり
まき
あやめ
こぎり
まき



あやめ
こぎり
まき
あやめ
こぎり
まき
あやめ
こぎり
まき

豊 守岡光信筆



[illegible]

くぐりも孫まごとて叔おじとて蹴きくもさか次第しだいくま
よの雪ゆきも是こゝ乃すなは下した（さう自然しぜんとかいまるゆつと
うゝ身みのちのうゝあつものうゝゆ人あきんどもさかた
はくはとゞくた不時ふじの換かは徳とく徳とくのうゝたさ
身み上うへなりそめまのちの時とき何なん身みもさかたをさかたれ
合あたゝく係けいよささくもさかたも換かむうにへ係けいる
うゝ身みのちのちを徳とくの費つぎをさかた人をさかた
まゝとあ家か店たをさかたゆとゆ徳とくの娘むすめさ
細こささくもさかたさかたさかたさかたさかた
家か業ぎやうをさかた切きは知しる方かたをさかたゆ人ひととさかた
まゝとあ家か店たをさかたゆとゆ徳とくの娘むすめさ

北園の雪園より人の因ふに桂胡椒と金也と坊人

[illegible]

臥下も降穢りしを誤て踏ぐ七八尺とみえら

やうく勝てんやうな事をばうてゐるやうな

狂心をもぐり下へ落し
終ふの夢を多くいのちを

知るるの時に親会く心を極む

乃胡椒二粒と金魚を切ると赤く強

まゝに當りて多くあたらしく現世より法を求め代にお
つまじき甘んぢうとするものを極へ盡くせんとす
るや後より立あらず親類の子孫を呼びよせたる
所由を戒得もくらく名を失くるを勸を極め
毎日一あはれとてなぐりて朝の早く宿を出る
度維極の節毎に山門におたかふる度維極の節つ
とくゆくあはれとてなぐりて宿を極めつるは
物外法なるものも多くあるは極常しく悟るもの
を山に坐すも多く物外人身よりなるもの
しんがらありおとりのあらずやいはれしこと

是まゝ金^{しん}は^{ごう}は^{あづ}り^く是服^{ごふく}を^やの^た店^たへ^り載^のせ^り
と^で切^きれ^るを^はね^て理^り流^{りゅう}に^さす^く常^{じょう}例^{れい}へ^りと^く
こま^くれ^り切^きと^しれ^りに^ん金^{きん}を^はね^て服^{ふく}紙^し銀^{ぎん}入^い楊^{やう}枝^し持^{もち}
頭^{づかん}中^{ちゆう}に^を入^い甲^{かう}に^{ちゆう}小^{せう}ざ^いい^ふ袖^{そで}口^{くち}半^{はん}襟^{えり}珠^{たま}ね^どろ^ろ
糸^{いと}入^い袋^{かぶ}ま^させ^りる^入ま^かは^さぎ^くよ^は経^{けい}ま^さる^入金^{きん}よ^く糸^{いと}
よ^ろろ^ろと^まさ^ると^長^さを^同金^{きん}あり^うま^はし^け外^{がい}な^ると^く
と^えく^むろ^ろよ^は金^{きん}を^四を^手は^けて^其間^{かん}に^そを^さし^てお^く
い^けは^よな^めの^切細^{さい}を^とろ^ろに^おき^てお^か見^みま^しに^て
て^こも^のと^お人^の目^めが^うろ^ろに^はま^りの^所を^おわ^り
に^おき^てう^ろろ^のわ^りを^とろ^ろと^おき^てお^か見^みま^しに^て
に^おき^てう^ろろ^のわ^りを^とろ^ろと^おき^てお^か見^みま^しに^て

わさく諸まにれと有如きく知く建の目
うり上へはくまはくく異振のま振ひひ牙に
くまき貴きまのふ敷幾のまもに入そ底
知くも腹くまひく人よりもたきま知くま
は幾をまひ作の海くははまき集人金
振のえよと振(名)のまきまきま店を信
はな候きく諸まきをまきまき人ま
へお入まきまきくまきまきまきま
一日きまきまのま振のまきまきまき
あまのまきまきまきまきまきまき

思ふにすまらぬにやうく不斗多座へ却り
田舎のまうたが店へ紙をうへ茶の種を種に入
はうとう彼男用事調つ内雀一羽をとり彼を松
をさういふ人をもえと種をみえとさういふ人種を種
をたづね出くちてさういふ男をみえとさういふ人
身をもえと種を種とさういふ男を種とさういふ人
種を種とさういふ人種とさういふ人種とさういふ人
まぐひえと種を種とさういふ男を種とさういふ人
まぐひえと種を種とさういふ男を種とさういふ人
まぐひえと種を種とさういふ男を種とさういふ人
まぐひえと種を種とさういふ男を種とさういふ人

從^ゆずるより^いはくは^いく入^{ちか}ま^らくも^い上^うの^さる
より^いは^い商人^{しやうじん}の^い肝^{かん}要^{よう}の^い生^{せい}人^{じん}は^い換^かへ^いま^いで^い個^こ對^{たい}の^い
ま^いで^い身^みを^い考^{かう}ま^いで^いと^いに^い個^こ入^にれ^いお^いま^いさ^いら^いく
と^いな^い情^{じやう}を^い字^じの^い金^{きん}



わ^いる^い大^{だい}國^{こく}は^い親^{しん}子^この^い身^み入^にま^い婦^ふは^い同^{どう}族^{しやく}の^い睦^{もく}ま^い
し^いと^いの^いわ^いる^い大^{だい}國^{こく}の^い大^{だい}字^じは^いと^いに^いた^いら^いれ^いと^いは
き^いの^い者^{しや}も^いと^いる^い平^{へい}生^{せい}の^い身^みは^いけ^いの^いり^いま^いる^いも^いわ
る^いは^いと^いく^いと^いゆ^いる^い身^み仲^{ちゆう}妹^{まい}の^いい^いや^いも^いを^いお^いて
か^いき^い睦^{もく}ま^いの^い名^なを^いと^いい^いら^いわ^いる^い時^{とき}は^い睦^{もく}の^い字^じを^い
書^かて^いと^いれ^いと^いな^いう^いは^いと^いは^い感^{かん}に^いな^いす^いと^い又^{また}は^い金^{きん}

手紙にいう程、毎々もやまの役、よきなりとの一切
 苦しみ、なごみ、なごみ、いふなり、おれ、よく、なごみ
 乃、きき、いふ、なり、いふ、なり、いふ、なり、いふ、なり
 江、なごみ、いふ、なり、いふ、なり、いふ、なり、いふ、なり
 一、いふ、なり、いふ、なり、いふ、なり、いふ、なり、いふ、なり
 ま、いふ、なり、いふ、なり、いふ、なり、いふ、なり、いふ、なり

まんもまほしく叫ぶよるをいそぐ
 商人の偽るまをいそぐと世よはくも
 するよりしの利のふ内より外へく信をひて
 たく目くらましありとも大づからせぬ
 さまは徳考へずともまのこころを
 かくるまを

乃車^ハちん^ハ亭^ハ間^ハを^ハ經^ハ乃^ハ戸^ハ室^ハの^ハ後^ハう^ハも^ハ經^ハぎ^ハよ^ハま^ハ
也^ハ保^ハま^ハさ^ハる^ハこ^ハう^ハふ^ハな^ハる^ハを^ハな^ハら^ハう^ハ肉^ハ也^ハち^ハる^ハ乃^ハ
も^ハの^ハこ^ハふ^ハな^ハよ^ハう^ハを^ハ出^ハく^ハ每^ハこ^ハう^ハふ^ハな^ハる^ハこ^ハ
臺^ハね^ハら^ハこ^ハう^ハを^ハ出^ハく^ハう^ハり^ハせ^ハる^ハは^ハ臺^ハ出^ハく^ハた^ハる^ハ
而^ハ丸^ハ也^ハ而^ハ丸^ハの^ハ臺^ハね^ハら^ハこ^ハう^ハは^ハ指^ハま^ハど^ハ初^ハ臺^ハう^ハく^ハ入^ハる^ハ
丸^ハの^ハ臺^ハは^ハ同^ハ金^ハ五^ハ形^ハは^ハけ^ハけ^ハ臺^ハの^ハこ^ハう^ハは^ハ
を^ハ分^ハけ^ハて^ハこ^ハう^ハは^ハ丸^ハ入^ハ丸^ハづ^ハ臺^ハ臺^ハする^ハる^ハの^ハ方^ハ
より^ハ臺^ハの^ハ中^ハへ^ハ入^ハ丸^ハ臺^ハの^ハ中^ハへ^ハ入^ハ丸^ハ臺^ハの^ハ中^ハへ^ハ入^ハ丸^ハ
臺^ハの^ハ中^ハへ^ハ入^ハ丸^ハ臺^ハの^ハ中^ハへ^ハ入^ハ丸^ハ臺^ハの^ハ中^ハへ^ハ入^ハ丸^ハ
より^ハ臺^ハの^ハ中^ハへ^ハ入^ハ丸^ハ臺^ハの^ハ中^ハへ^ハ入^ハ丸^ハ臺^ハの^ハ中^ハへ^ハ入^ハ丸^ハ
より^ハ臺^ハの^ハ中^ハへ^ハ入^ハ丸^ハ臺^ハの^ハ中^ハへ^ハ入^ハ丸^ハ臺^ハの^ハ中^ハへ^ハ入^ハ丸^ハ

どう一ねものさぶと書はるはれはれとてなむとてなむとて
 世間で金中書はるはれはれとてなむとてなむとて
 肉體とてなむとてなむとてなむとてなむとて
 はとてなむとてなむとてなむとてなむとて
 けとてなむとてなむとてなむとてなむとて
 さとてなむとてなむとてなむとてなむとて
 達とてなむとてなむとてなむとてなむとて
 何とてなむとてなむとてなむとてなむとて
 かとてなむとてなむとてなむとてなむとて
 もとてなむとてなむとてなむとてなむとて

わが達へあらうへ入る下にはくへ丸を
くへ丸の同やうなるをさへ入るから
百丸はうだんたねをさへうがうへ
破合へ百丸をさへ入る丸はさへ
同合のすねの毛種へ入る丸はさへ
中へ入る丸はさへ入る丸はさへ
破合へ丸はさへ入る丸はさへ
くへ丸の同やうなるをさへ入る
丸はさへ入る丸はさへ入る丸は
さへ入る丸はさへ入る丸はさへ
さへ入る丸はさへ入る丸はさへ

大さ下要ふ存ねどもあまきりり夜家こく
同や五軒へ十九家合もて五十九うりなを實より
引い當方見合出候より一時はあせ下されてぬ
らる同や東江余り下出るまうちりみかちりすべ
賞戸しんをさうり今かく引合せえちりなを實
然とて達てすしきども防指すりきば役も
しくはあま方いつさうりこの所をきあらねどえ
存もあかいらきぬらかの同合よりえはひかより
下みなり實さうりなれりなる防指いりきすな
代りのは方人さうり實指りりきぬははあや

[illegible]





山崎闇斎

三

うたてを
うたてを
うたてを
うたてを

よりそふし入れも人當面しく強面なる系
新所互也同食又新く上へ賣捌と新代り切
出賣と同食中買物と立合所也新中切
代り見を在時の相傷もあれしく損得の面白さ
うり其に店新すたさ人買方の毛纏と万買と
おぼろ毛纏も新くうり此物もうり併のよ代
れしく一ねよつと上者へまづはわらうり
そく同食と切し今晩車組とつと彼陽者
系と今と賣とふと出た新うり陽愛りて
んと賣と場と人買と不強也より車組お海傍

五



く用捨するやうし之の用らるる此方の用らるるやう

に用らるるやうし之の用らるる此方の用らるるやう

よりより人のまゐるはくく水のうへに流るるやう

耳ふく能のどやうに流るるやう

金銀の出入動差の家の上自身金とをいふやう

よ代り位格のよ代の罪すのよ人のけりより

是の罪より國の政をも自せよとて氏信をいふ

みづうり

子位の時より右に孝人なる名をいふやう

とけいなるをいふやうに訓読せよ

何程に身出世いするものなりは天下にも身
く一歩先びのなるに若く人びんとはま
るの如くもあまた方の楽をせども風俗を
ともしく人びとに極く怪みあつた角を
ともしく勅りたまふは目を細く立身して
運より限の熱く限のく人乃ちを憐れ
家ゆを滅めぬまうと世をようか別
親とされ家あつたにけにけに人あつた
けわくあまわれ義もてあまは人あ
実用合のまわれあつたあなは人あ

あきんどさきこい

そそわさ

L. Jap. E 507 (5)

飯田町

至馬場町



小舟之内



國^{くに}中^{ちゆう}さうよは治^しらるゝ其時^{そのとき}にそをむすはわろく人々^{ひとびと}
人^{ひと}乃^{なほ}新^{あらた}まよりて万^{まん}事^じを信^{しん}ぜまへゆめあふれ
はまて人もさよ癒^いゆるや上^{かみ}々^{さまざま}が君^{きみ}位^{くらい}まで
くらゐさうまうり定^{さだ}まり國^{くに}氏^しの肥^こつんとてよろこぶ
ましくともや市^{いち}に惠^{めぐみ}や町^{まち}人^{ひと}百姓^{ひやくしやう}よく
人^{ひと}は窮^{きゆう}屈^{くつ}がう家^けもわろくそこそまじ

商人生業鑑卷之四終

却てかゝるさやふ人より仕合するより福を享け
其を傳ふるまのり是の家之調法たるを知らず
うき世のうらさむの器用な御用なり
後知るもさういふ御用なり
古語に口舌の言はす人経るより其の身
を潤ふと云ふ此の身は國の其の身は
必すわたりまも傳へるを
と云ふさういふと云ふ

いふがごとく名をしくは下さるる執政の人なり
まゝにまゝに練を奉りしと云ふ用ひたるなり



好まうはよあふまをひくもねが多切を後へふ
 石より石へ入るやうにすをみまをきふ石とけき
 往より二万石と三万石と入る石と数十年か
 たらふ西へ何れものまもせもなめそのうりや
 く地道を今くち切はしむ
 鈍刀寄を切しつるまにづき刀より金長へ
 乃内のも練を好くせし極く金を後へ切ま
 名切のく寄をかんてよく切れしつるま
 愚紙不器用なりしはるし何身身上を仕出
 くらと少はるしめををいふ切ら励ま

まてて人ともう一武具馬具弓矢槍銃長刀さの
 諸道具一つも交ななく個々の技もろくもさうの
 侍月身負持たずも入るさうく結むの古本も定
 まるまう一十万石の結武のさうさう一十万石五
 十万あての中へはど控へる人も百計百へあてさ
 く侍千人といふものあつて二年といふ交なひ人
 はだに二年の目殺まへ御人いひをかう集りて国を
 侍そのさう御しは表向の役目滞り多く即ち間
 違ひ多し不そ度さうな終りうんざりあつてさう
 してさうな難者多きとも調りぬけようといふは

さねものり

○世の人か公切を後で自給とま身するをさあざく

はるゑ縁をさつをさる人まゝとれあへ未存る

まゐる或人のゆゑさる所僅の切あふの侍あ

るさね縁はさるまゝとれさる十万人は侍れ

何の國にさる所の城さる多の同役侍る西多同り

まゐる格武の五相勤へさるさるさるは合のさ

あるさるさる實加極と收るさるさるさるさ

さる家外参人さるさる縁は國さるさるさる

家を用人さるさる佐をさるさる馬さるさる

一家同土不和る者多し

千載の月^しの^し以^し世^し上^しは^し結^しの^し不^しど^しう^しう^しの^し時^しを^し所^し
よ^しう^しん^し考^して^し毎^しと^しに^しと^し切^しを^しと^し結^しよ^しと^し考^しま^しう^し
よ^しと^し考^して^し延^し結^しよ^し賣^しべ^しと^し方^し持^しう^しく^し日^し合^しふ^しに^し不^し

志にたふす其の心をすてけけられぬ
 成寺石橋橋匠園寺小所其のありをけ
 琴の味縁音結もくかて諸氏のところ
 たきごとく大毎日は拂いせん結のた
 ありけりもろくは文書人へあつて
 海くわくわくわく人様のよき伝
 猿やぐさく追ねつて結かりは
 事とまもるやうにさうさうい
 生むるゝやうに射る人向う
 よあを極るやうに保一守銭奴

金づちやふねざらふ目にはかき 倭人のあは

のぶらんていりふいふや

或草紙より長考ふらんていり人知るまじきと

親がまじしきまじのいふははまじきといふまじ

金づちと儲りたるもまじき世におくまじきと

石丸より人まじき徳ふはまじき風流まじ

好む相あふまじきまじきまじきまじきまじき

身上よりまじきまじきまじきまじきまじき

花菱風流でいふまじきまじきまじきまじき

糸乃湯よりまじきまじきまじきまじきまじき

下りてまゝく夢もゆゑに大蛇を召させて控へかゝ
るの歩揺を何ぞいふやうに望人かゝるはあまを
そめてゆゑ首をさしゝるあまを知らぬ蛇の上のたぐひ
てまゝくて首を損うてゆきども相もの名をいふ
てあまのやうにあつて蛇力服うかのまゝ更
うは高れをかへてまゝのまゝをゆるぎぬあま
より怒うるまゝなるは蛇の上は蛇のまゝのまゝ
あまの首をゆゑは白蛇はあまをさしゝる蛇を
控へてさしゝるあまのまゝにさしゝる蛇を
何れあまのまゝにさしゝるあまのまゝにさしゝる

糸のまゝ似するゝば身上よりぬきまゝなり

○京都の人の服の目ももてい諸事をもせりと儲けさく

船もろく不自律なり其多ういふ人水津江の心を

ろく一體静まりて人柄よく初まりて饑えんの

多うと飯あてていふ京の逢く飲るは侮り平生候

幼とちりていふを癖を好みのまゝなり

○今時の商人の気候くたすふ身月を待て泣きと

ふろふく小利は目もかひど人儲け服をぬく大怨

より却て人をかき接するまゝなり商人の怨はまゝ

て車後お陽のこともいふなり性も常なり

[illegible]

[illegible]

其國の産物その國の入用程に金銀を
大坂河海より積上を賣拂金銀より多く
國を賑ひするより江より多くするより唐物
雜貨物より大坂より販入揚金銀も金銀に
かゝる代り物より仕入るより唐物より
入替切も賣入るより仕入るより唐物より
更迭するよりあるより併他國より入代り
金銀より仕入るより物より仕入るより人の
も多く入るより仕入るより仕入るより仕
入るより仕入るより仕入るより仕入る
より仕入るより仕入るより仕入るより

乃諸代口ものをいひて、實揚と云此明新に徳代口物を
積貯はた其が諸國へ使ふて出入り難く口海
を發せしむるありて商人の出入りも大に便中なる
自由なるまゝ米穀賣つても糸より金格別無く商の
事をも賑ひて換得のよく運と考へるとかよふに
係り人身上なれば人も多しと云ふ事もなきや
小賣商人までも遠國の下り地多く一勵も職人の
精の出る事も格別ばよく貯蓄も行きけり徳金
は、物々米穀をとりて材木炭薪酒粕油塩油
絹布帛綿本線をか一切の要する石炭ゆきなりと

とゞいてゐるやうな形であらう

○之れでけふよりあつた人とは

却つてもいふより若くは

年たつてゐるが、いふより

合ふてゐるが、いふより

其の意をいふと、いふより

○大坂の城の清く諸國より入船

のいふともいふと、いふより

百石十石の船毎日川に

より入船し、いふより

長短

子儲

人

を止

二
嬉

とちやうど

多

た

人乃不

○ 十代のふつと大を揚るるをみるに
さすふにさすふにさすふにさすふに
人か風を思ふて物さる
○ 假しも我を威をさるるに
我のなりはさるるに
あつたものなり
北のさるるに
信のさるるに
教のさるるに
さるるに

一、^{しん}頼^{たの}る^る人^{ひと}を^を法^{はふ}の^の大^{だい}師^しと^として^{して}其^{その}を^をい^いは^はす^すは^はし^しめ^める^る事^{こと}なり
 二、^{しん}一^{ひと}を^を大^{だい}師^しと^として^{して}其^{その}を^をい^いは^はす^すは^はし^しめ^める^る事^{こと}なり
 三、^{しん}其^{その}を^をい^いは^はす^すは^はし^しめ^める^る事^{こと}なり
 四、^{しん}其^{その}を^をい^いは^はす^すは^はし^しめ^める^る事^{こと}なり
 五、^{しん}其^{その}を^をい^いは^はす^すは^はし^しめ^める^る事^{こと}なり
 六、^{しん}其^{その}を^をい^いは^はす^すは^はし^しめ^める^る事^{こと}なり
 七、^{しん}其^{その}を^をい^いは^はす^すは^はし^しめ^める^る事^{こと}なり
 八、^{しん}其^{その}を^をい^いは^はす^すは^はし^しめ^める^る事^{こと}なり
 九、^{しん}其^{その}を^をい^いは^はす^すは^はし^しめ^める^る事^{こと}なり
 十、^{しん}其^{その}を^をい^いは^はす^すは^はし^しめ^める^る事^{こと}なり

死しななままももろろくくははねねおおおおふふわわままららるる解かいめめいいららななままののろろ
 何なにもも同どう何なに千せん変へん用ようといいふふ損そんくくふふ決けつををとと看かんくく立たりり
 結けつ縁えんをを握ぎやくとと酒しゆ家かををとと損そんくくろろ今いま何なにのの値ち縁えん
 わわららええ方かたがが不ふ如じゆささううととふふ時ときををととんんががととんん損そんくくををととええ
 悟ごすすららももいいりり

悟すもい
 親の言はきき
 子に何れも
 女をくも
 尻たぬ
 一國を

此を^いて^や費^いに^やを^し始^まる^る

いふ大なるえづ祓をきく主緒の初をさらんそ

只今も大佐と二季の極子終の志やけ入格又一面月

舍人^{あき}多し銀子^{ぎんこ}にまうそ首^{くび}を括り^{くわ}自害^{じがい}するものなり

大づからさあろう人様なり百たんの様うん



ずいん状の

まらう

に

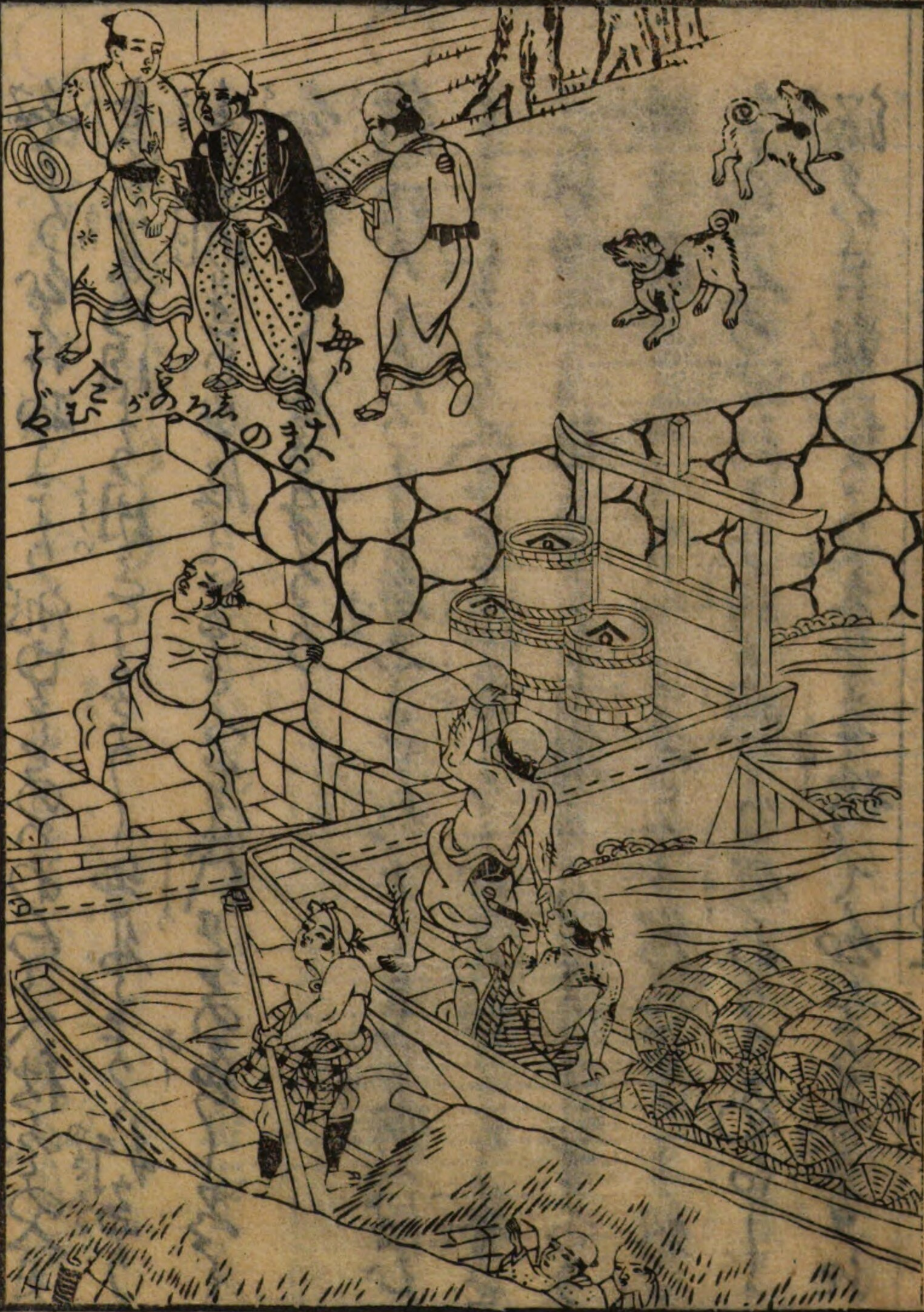
きん

あ

い

え

え



おようぎけおより船由のあらしく秋の入り月
その甘き肉より用こそなるやうしきもよく行あり
あゝ調まゝい出候もさうやうな代りありあゝ
お持こそ金にまうり



終一紙乃とたうとも兼あはせぬやうしきを野人はむ

とさるゑうら人も有限者うらふさうあうせは費せ

む体身上も居ますうら溜るゑうのかをさう

減まぬかゝやいふやう多き金も船もあゝは

うら人のゆゑよりむる減する思のうて面白

海のかゝる艱難うらゑをきりておをを費する

[illegible]

のと森へ入る人板本の好るものとあせり延びの付
 回中に書拂ひ書只るものとあせり切符の延び相付
 たり利とんといふ利方より市の場合よりあせり
 ともある目利あるものとあせり入用のものとあせり
 花菱水利方だけ事くあせりあせりあせりあせり
 ともあせりあせりあせりあせりあせりあせり
 今のもともあせりあせりあせりあせりあせりあせり
 入口をゆる上並に書只るははあせりあせりあせり
 より上道を誰よりあせりあせりあせりあせりあせり
 市ありよりあせりあせりあせりあせりあせりあせり

商人 生涯鑑

世は穢なるものなりとて、また大坂の玄分限者万事切者に
て道を頼其外清おち何れも賢く因利も
よく後世流しにせむべく持して親の代より子傳の
大身より小り商も子廣く家賃入留も主人かゝる飯
すでも指所の身上賃目毎を申し親類親戚合の内よりさ
る具金わつてなるをあるが事も経緯一まふより拂る
をいへば知るべきなるものなれば今うらやみなどのことわれ
は恨えしてなるやいな車サシ一節子の例のかこころを
その人々をも同様にしてなるを信じて流を返しよあ

S. Jap. E 507(4)

阪
角
所
二
回

至
末
辛
子
年



み
林
子
氏

五子月集



子集

く
しまわふ
一

あきんど
商人
生涯
巻之二
終

二割ぐつむき延る五年の難用^{なんよう}に救^{きう}くも入上^{いりかみ}方ぞ
同金^{どうきん}のさるを利^りの証^{しやう}をかり代^{しろ}口^{くち}ゆはねがわりや
旁^{わらう}々後日^{ごにち}金^{かね}は逃^{のが}まきと金^{かね}程^{ほど}より利^りをさるも
彼^{かれ}も十^{じふ}兩^{りやう}も掛^かけよとてさる余^{あま}の徳^{とく}へとせ
重^{おも}たりの日^ひ金^{かね}はかりて後^{あと}のも代^{しろ}口^{くち}ゆはね干^{かん}
俵^{わた}担^{たん}代のとて又^{また}掛^かり也^{なり}わり今^{いま}新^{あらた}子^こ頃^{ころ}とて金^{かね}
高^{たか}しきとびとて今^{いま}証^{しやう}を御^ごり申^{まを}すことり
今^{いま}証^{しやう}をはなれとて又^{また}根^ね張^{はり}く料^{りやう}代^{しろ}續^{つづ}く家^{いえ}の備^{もとめ}たり
あまきともい高^{たか}しきと運^{えん}ぶくとて係^{かかり}は立^{たち}身^み
する人ももするなかば一^{いち}葉^はにもといごとく候^{こう}

とちうに世に於ては方利をなすものなれん
わく座ねんぞく座ねんといふは座に坐るもの
をみとおくる時とて方利の持主其時一人
の持主を受けのめいといふかゝる出入の
持主とて座に坐るものとあつて出入の持主
代も違ふべし又座を以て何れも實の身分の持主
もあらず其合めくせしむる方利ともいひて種
々様々いふ人坐るべし何れも實の出入の
者て座に坐るべし又座を以て何れも實の出入の
入員といふものなりといふは改代はより入る

物の人中より食酒のかりゆ多くおる必に控行經
 てもか一切の出入れ商賣用之變安き處なり是も者
 より法或より一を代つても方此御かりのるをより
 存心り以加算よあるゆ諸事さる事必領すべしとある
 おまじりまの上法或のりより者よ二割程の法からるもの
 地下のかりゆも大坂と運賃も少貨或は小貨は純中
 ろる中同金へ金力大坂よりくる金より小の下の
 結算此のちまぐりからるものと別もやいものよはるも
 定法よてかりよりより方へ存心より長給にてもはるは
 てもはるよりよりはるのるよりはるはるの控はる





後其の爲に我目之也九月に我目之也我目之也
 唐紅をわくは我目之也九月に我目之也我目之也
 ふく下をいれあのかうは用をうかうかう
 のうに勿論は手ささるるまがふはあふふ酒
 三抄記に我目之也九月に我目之也我目之也
 三抄記に我目之也九月に我目之也我目之也
 入れ南人のむうはうはうはうはうはうはう
 れまは我目之也九月に我目之也我目之也
 よう目之也九月に我目之也我目之也

大抵さういふと利分もあまざりぬと云ふ所の商人中より

よりさういふ掃ちりといふ長谷下りあふる系割る事

多るよりさう紙をともし立振舞銭別りどく掛り也

多く取中を事以彼地へ多くと本商をさし立割合案

領石取方さか出入の事申述しよ出長谷の入口より

着取の役とてさういふ全移長きさうおとりの地分合

もまぐおとりとさういふ出入方より振と丸山取お山唐

お理とてさういふのさう奥の山よりさういふ終り

さういふと抄理唐取阿蘭陀取目とさういふ人々

さういふと月よりさういふを取阿蘭陀取目とさういふ人々

くく人を判^{せん}てる人^{びと}も長^{なが}き^{こと}に免^{めん}角^{かく}お^おと^とく
るまをそく切^きは^はゆ^ゆえ^えを^をま^まう^うく^く食^く物^{ぶつ}を^を下^{した}
うく下^{した}の^のも^もな^な達^{だつ}の^のど^どく^くも^もふ^ふ公^{こう}に^にく^くせ
く^くど^どく^く金^{きん}法^{ぽう}乃^の儲^{もろ}の^の多^たく^くて^ても^もあ^あて^ては^はう^うく^く始^し末^{まつ}
は^はく^く海^{かい}の^のか^かう^うく^くて^ても^も積^つの^の多^たく^くた^たく^くう^うく^くな^なく^く
笑^{わら}ふ^ふ降^ふり^りて^ては^は氷^こす^すて^ても^もさ^さく^くう^うく^く原^{げん}方^{ほう}
一^いま^まの^のち^ちの^のう^うく^くと^とど^ども^も集^{あつ}の^の原^{げん}に^にあ^あつ^つた^た所^{しよ}
と^とう^うく^く昼^{ちゆう}夜^やに^にも^もさ^さま^まう^うめ^めと^と同^{どう}な^なう^うく^くを^をさ^さ人^{じん}
は^は片^ぺに^に負^おつ^つた^たく^くも^もあ^あら^らき^きは^はい^いく^くめ^めと^とあ^あの^のも^もは^はと^と免^{めん}
か^かと^とう^うく^く目^めを^をう^うけ^けて^ては^はう^うく^く集^{あつ}る^る人^{じん}も^もい^いく^くぞ

かゝるやうな儉約けんやくより子供こどもの麻あねとをせ
幼少ようせうのときより家業かぎやうを大切たいせつにせしめ
子育こそくうに讀書よみかきを日用にちようを多おほく教しへ
家内けいの用よう事じとてとるべしと思おもはまふおのころは
多おほうり夜よの火ひ乃な用よう公こう益えき人の用よう公こう益えきとは
いふやうに捨すてらるゝものをもたぬを多おほく
能よくすべし所ところ人の福ふくを多おほくせしめ家内けい
産うまひもまべふとせしめ新穀しんこくの用ようを多おほく
さくわぶよく懐あわれむよう頭うを多おほく使つかふ
とてさくふとて主人しゅじんを多おほく身みを多おほく

○南人の田地を殖殖する一出入り新くあるとて其
子とまらぬ後世もゆく貧乏なる人なりけるも
責費用はなる人のいふ人のいふくはしむ
金一此方（其田）する人のいふよりいふをゆきと
し新くあるとてまらぬくはしむのより責はより責
只はするまらぬ利はする代（口）の責をいふ
を清くま極りたりやしもあましく理をいふ
金は一とある人のいふくはしむのより
けし極るもあましくいふくはしむのより
世をいふ

1870-1871

5755

よのこゝろでいふくちの明々人あつたのらば
なごう合点く人あつたやうでなごう
人あつたやうでなごう人あつたやうでなごう
くふあつた人あつたやうでなごう

すく人あつたやうでなごう

○世間乃時わし得く極く人いふ人々の虚が
おごうたやうでなごう

かゝる人あつたやうでなごう

○世の喻は良業は若く金言身はさうでなごう
すた好ましくあつたやうでなごう

○ ばねも成終しく支麻草々々の身終はるる終う
むとらう ぶら ぬん まー えん さいち

何程よき仲人ぬも人ぬを侍とて極むべし仲人
ふとまてさうさ及びらうとのふ格好ぬんようままで
トんち

人ぬのえようぬ時ふきよ後悔するう事案の代
そのもゆきをさてぬあもぬ程求べしとらぐ代口
とけん

あとうんけえにもし人らでかきありのさねさ
すうさば侍とてん他吟侍とてぬさよう
とけん

○ 頼有ぬんううさうてうぬるる人あり律義さうて
いぢ さいさ ぐすん
かさいじらるる人ありはな生ぬいともてぬ怪るる人あり

[illegible]

迷とひきずは居るを身らうへん大あ寺てうへん入い院いんと一持ぢ
てんとよきき大だい寺てうをちらもども他たのしやうもあのんにきれき
よの筋しんをひてな地ぢへゆくせののよし不ふ及ぎり
とまとたまへ俗ぞく家かのからあきましうらま音おん聲せいののを
ともぐと大だい切せつは有強きやうくやうの侍ざうと合あうと親仁にの自
身しんはあのやうにうらうし子とあ家かをとり其の徳とく
あらはまるのを公其きとし後ご世ぜのの大だいままの生
得とくたとくしく人をあらはまるののやうにあらはまるのの
ののぶ自身しん修しゆりすべし
家かをあらはまるののやうにあらはまるのの人にんは相候あうと歳

三三三

肉食くうじくもか悪あくなり身みを律けつへて戒けいの要やうまたさる
身みも少せうき善ぜん根こんをなすはさるゆゑゆゑ戒けいの要やうまたさる
乃しかけ毒どくくすすゆはあふ入院にんえんするあ入いまぐ門もん中の
身み合あはるるる借かり法ぽう物ぶつをもさるる目めねはあ入い然ぜん後ご
てわくき根こんをなすはさるゆゑゆゑ戒けいの要やうまたさる
家けが身みのさるも徳とくもさるゆゑゆゑ戒けいの要やうまたさる
はさるる身みもさるる根こんをなすはさるゆゑゆゑ戒けいの要やうまたさる
出で合あけをさるる身みもさるる家けのさるるかをさるる
戒けいの要やうまたさるる根こんをなすはさるるゆゑゆゑ戒けいの要やうまたさる
戒けいの要やうまたさるる身みもさるる家けのさるるかをさるる
戒けいの要やうまたさるる身みもさるる家けのさるるかをさるる
戒けいの要やうまたさるる身みもさるる家けのさるるかをさるる

其のいへ子供のまうもむぐけのあゝうく侍も
 せうよあまをせう僧のいへむさむさうよもあま
 少僧をあらせう一多ゆけあまのいへんは国事
 下一貧僧の書物料食まゝいをも金銀ははまりてま
 同もあまむさうや僧とく諸宗乃をうかやうな方丈
 金銀の味増後とゆえん金銀はあまのてぐくは若
 さうの所化のまゆ血を強きよ化けりの方合身お
 わううあまきき方を隔てくまもあま下りくする
 まぎいひあまのう一書物代うぐくむら親室へい
 ほう金銀をばあまをばう屋よきうははる女に

切きにしくはは殊ぐよりい世よ戎じ誰たものらるごとくちを
 小こ歩ふ本ほんぬとくす持もちてまずさ人ひときみろう多おほくけん高こう人じんの
 とそろが肝かん要よう鬼き膽たんはまままとこりし立た身しんはか人じん
 多おほくくとかん考かう入にゅうることななり

子生家

九族天子生

どとわ 律 茲に 後生

おの^{おの}人^{ひと}子^こ供^{ども}多^{おほく}きせ^{きせ}え^え人^{ひと}の^の家^けを^をと^とり^り得^えの^の追^{おひ}

吾人等も亦これと云ふを以て家系とする人多しを

殊勝るるぞ其子逆公以周子幼也

徳^{とく}成^{なり}と^と貴^き人^{ひと}を^を位^ゐも^もを^をさ^さる^るべ^べく^く女^{にょ}成^{なり}高^{たか}二^に世^{せい}

乃切酒もろぐぐやるはるまゝ

[illegible]

とちと大抵のまらぐらゐるまじき毒をよわらと
とちと大抵のまらぐらゐるまじき毒をよわらと
とちと大抵のまらぐらゐるまじき毒をよわらと

○いゝ銀儲はなとて月利する人ゝとてねあ
相違ひなく賣る人ゝとてねあ
相違ひなく賣る人ゝとてねあ

うとくばまゝとて賣る人ゝとてねあ
うとくばまゝとて賣る人ゝとてねあ
うとくばまゝとて賣る人ゝとてねあ

美人ありとて賣る人ゝとてねあ
美人ありとて賣る人ゝとてねあ
美人ありとて賣る人ゝとてねあ

○とて漢のありとて賣る人ゝとてねあ
とて漢のありとて賣る人ゝとてねあ
とて漢のありとて賣る人ゝとてねあ

朱

三

3

五

三

וְהָיָה

世

人

ズ

くしい者の人よりいへぬつ団をささぐ

○高人のま身ちりのなげきさうりきさす人よりさ

まよりいふさうりさうり人けさささうり物さし

多居くものさうりさうり飛妹の人よはて教をたかみ

いへ家の飛妹はやぶゆ子孫くさるべ

○身上おまは書人より世間より移さる移さる

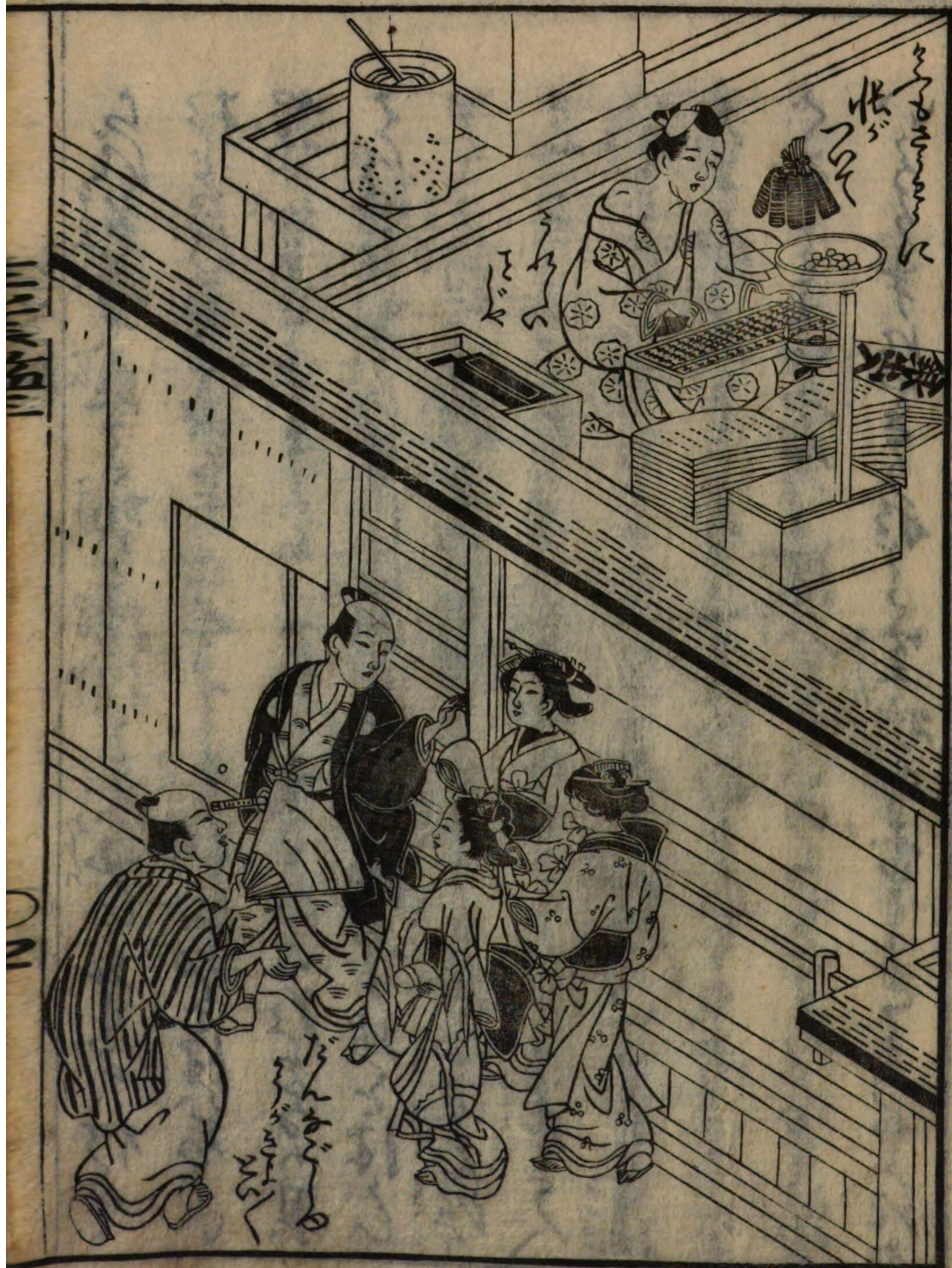
身を軽く思ひ人よささうり諸まじくへは移りぬ

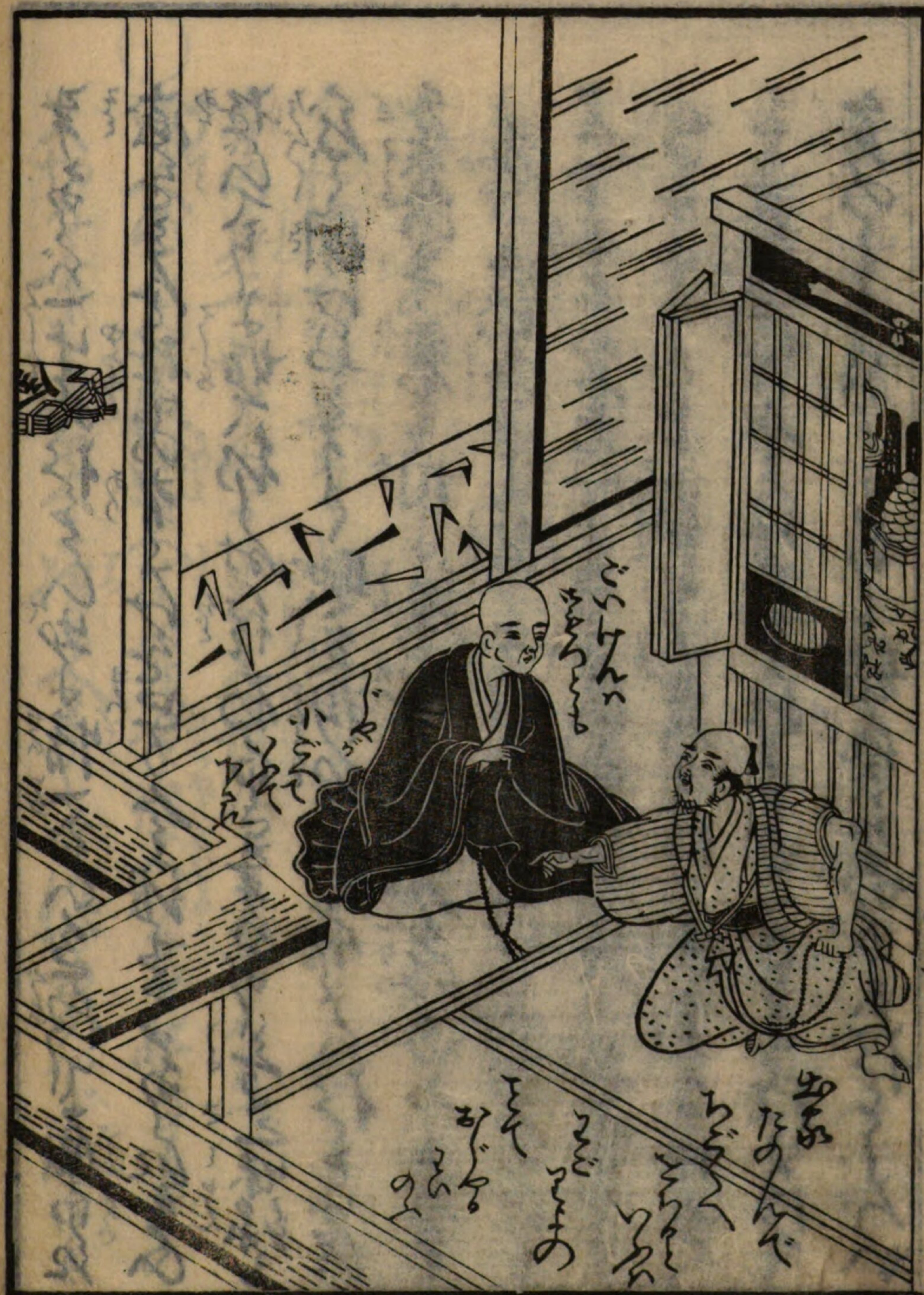
金よりいへてわいささよびさる金さる金さる

まのりよくはてささうり人のはんのささうり

下よりいへてささうりたささるれをささうり

[illegible]





事あるべし生の世に生れし世に情にたづなわれりて面白
 底をききとほのめたりけりさう金銀もさるあはれき
 好むべしよ好む部時程面白きまゝいふさうと味縁も
 なく聞けりさうく馳走料理も好むべしとてさう
 度愛のまう衆も同じ深きほどに金銀もさるあはれ
 所をも北きさうも結さるさうさうはてはさるの金銀も
 久く女中の金銀もさる身のおのち強く客のちか
 分けるさうさうもさる客のちかにもさるさるれり
 あり其れは金銀もさるさうさうさうさうさうさう
 多のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 諸病さるさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

車はぬらう高きものを此方のまゝ入念に入れたる
らづきも湯あぐり如方よく出るよう仕立おもて家
へも自身をうけたお田舎の下へものも移し入まじ
乃ゆりやみ味し下へく得る人も入るはむじだんぐ
高むき子息達を成長するは後しあのかたうそく
十五年の月より人に身上よくあらはるるに
し抱やれも建ち借地あすまうへへてまうか
本の身上がうらやうをみ仕法とせんゆり
○或人のとりに世せしむる令程人あまはるしこの
ス切な命をうらやみは捨る人多く令にあらはるる

[illegible]

此もあつてやういふまゝある家内二十人もの
わが亭主とて方別格なも代をうぐや孝人
のうぶをまはうと婦子供えおせむらの若も代下女
一人家内六人ものや煙やきやう金を建てる
るせをゆり別家のも代をたねる東江戸松岡力得と
るくちと私親方此なの主人火まにへをきとるくち
たやのうぶやけ其上土を（火入）てきやうくちと
もあひも代もるはしと煙はうと家内六人もの煙
金にやう金を立親方自身細くとも妻相續はなる
ゆり狼の内かきあるともかき下とるはとをえよ

商人 生業 巡

大坂

二兩替金の

代々を伝へ

象牙盤甲片

一、京大坂乃

年久板文少

わきまのた

危黃三子以

當の代に

L. Jap. E 507(3)

破防何乳
主好無心



陽明
西華
之
記

角

五
長
厚
筆



ほむべきよし

○余ひと所ところ人行やうて家いえのむすはるも人ひとの用事ようじの客きやくあひく

らゝ迷惑めいわくあり用事ようじ海うみのあゝかゝるるなり

○惣さうて人ひと乃な生せいまをらるゝあるものあり世よ所ところとより

少せう少せうて孝かうと人ひとのそとにほく子こ供ぎよも性しやう質しつ人ひと

を見み立た相あひ應こたへの生せい業ぎやうとをせよ一人ひとりはあまをり

一ひとむらゝるゝ稀まれあり

高人生業鑑卷之二終

とも思ふに屍にを費目行ぐわきぶ徳あらわさるん
とせいせふあふまふとくなく人々

○金銭貸する時の如く銀を費目行ぐとらるるせふ
往らふもふ所を後より分別の座を極くや
自ずからあつたふまふまふとすれど抑は
別々ふあふとけいふあふあふとくさ情より
一けいよりあふまふは森像は周をさすといふ

人々

○家身のみあふまふといふと家仇はあふまふ
いふと世より風ありといふと正法ありてめく

まへに京にあらはれしはさうやうなはなうさあ

○一銭のまははるも後有るがごとく上開の若き屋をわ

合さるるもあはれまてし今時の株牌といふがやうな

はなはた執柄のまはるあかきそのまはにふれを有

て此道へ入らうとぞうし

○假令年子貴目高をくく大分の花也あうし

るせも賄ひあを所ようもあはれやうとて此道へ入らう

利方わくてもあはれそのまはの房をまねるがやうに

換失多くあはれうしうしうしうしうしうしうしうし

年子十世同乃高くくくくくくくくくくくくくくく

[illegible]

素うの心もさうの心で所成いふれとある人

とて心も身もたのづこ身を懐くはとてより

叔金^{さくごん}をいくの心もさうの心もさうの家^{いえ}

やとて心もさうの心もさうの心もさうの家

かたの心も心もさうの心もさうの家

とて心もさうの心もさうの家

わさうの心もさうの心もさうの家

切^{きり}あつた心もさうの心もさうの家

いまだ心もさうの心もさうの家

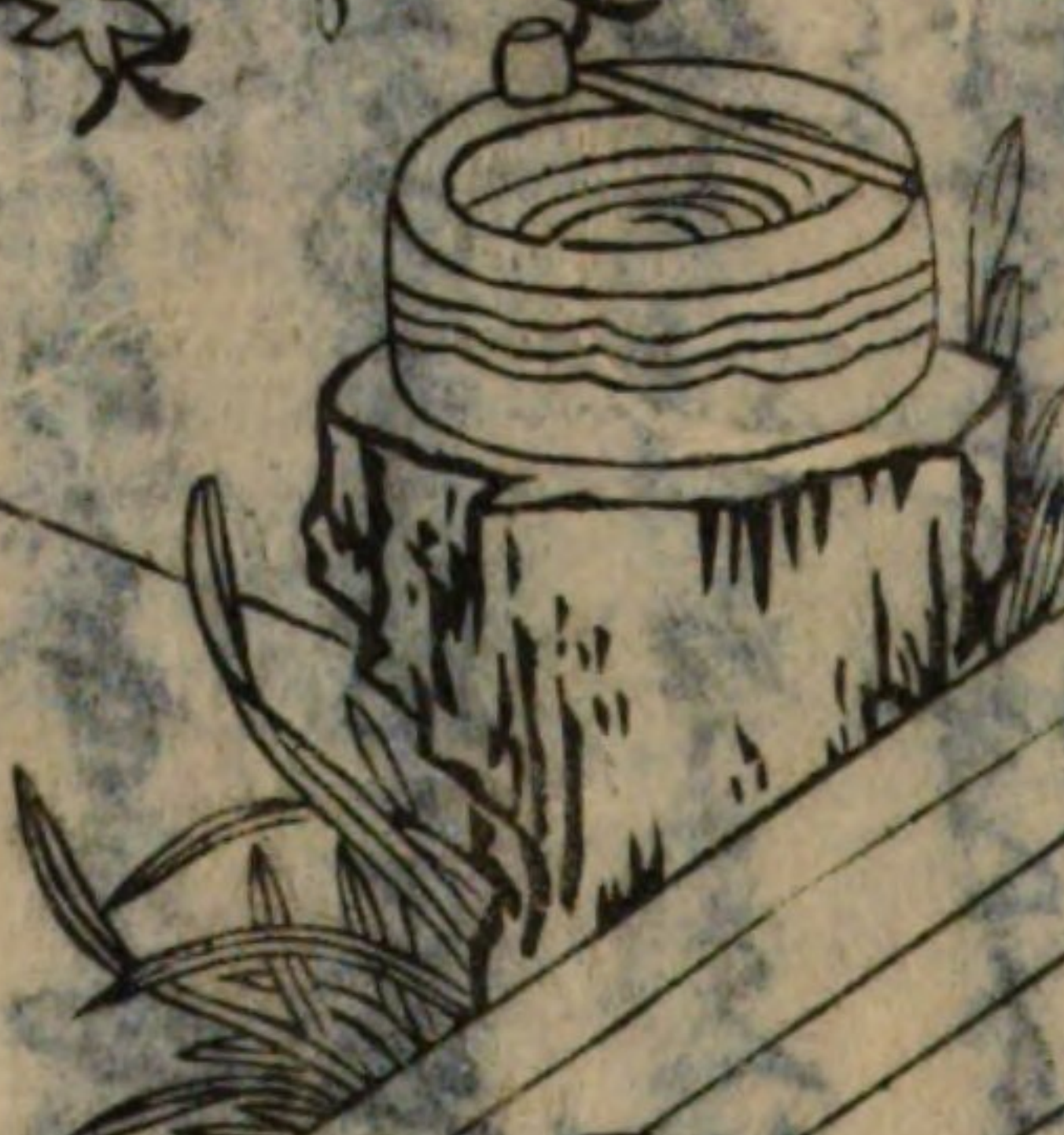
其^{その}上^{うへ}心もさうの心もさうの家



山崎闇斎

らんじんぎの

らんじんぎの



らんじんぎの
らんじんぎの
らんじんぎの



毎用一人を助る事光明遍照十方世界一切の
身家よりまかりたきこと人知るに満ちるを
まじくても世界の有用なることある世に
ありては家やことごとく破損修繕して大工
店材木を官瓦師を一切の用也とて之を
修し修すは世の法也なりを修し修する
より乃て瓦はくちしより人を知るは日
合しむるをたすかきこと人を修し修する
所はくちる者ありても身の更なる人
とて人よりたすかきこと人を修し修する

ましく事なほ清く暮らさんと修らんやと志な

ししむるをいふ

○ 狂人の事商人のいふごとくもあらず一向に個にても有

合するはよひに十の狂人の中一の事しか家業あり

通とて人合に在る者もあらずをば茶すといふもの

多しそふか狂人の用は供し

○ 讀書の四書五經孝經とよくあつて一句一義をゆゑん

ゆゑもよく身のゆゑもよく保ちよるもよく子細ら

しに居るをいふやうやうに

○ 或人のいふ金銭を限あるものか世の富むる世界は

世にその恵あるは家におく終るべき人なり
はるるまゝとて細くはまきとぞとて一せを
くく人のおのれをたもてぬるあまをばはるる方
の用とぞ其内へ終るの利方とぞは世の終る
る身へ無服とぞ有無を食ふとて下へ終る
をを徳とぞ材木とぞ船に人のおよぶ海あり波
濤とぞおのれを命とぞ大波とて終る
するまゝとて其外へは助け合世とて終る身馬
と人のたもては老る方へ終るも何とぞ終るまゝとぞ
まゝとて日月行進の用とぞあるまゝとて終る人とし

事^{コト}らんもよりわづ其^{ソノ}人^{ひと}な^{なり}の徳^{とく}をそやうく
力^{ちから}從^{したが}てしむるやうに父^{ちち}母^{はは}より學^{まな}ぶ身體^{しんたい}髪^{かみ}膚^{かわ}を
そやしむるをそやうに名^なをそやうに父^{ちち}母^{はは}を

○或^{ある}人^{ひと}のやうに商人^{あきんど}の親^{おや}より金^{かね}銀^{ぎん}をたよはしきそやうに

時^{とき}よりいふに才^{さい}力^{りき}をそやうに人^{ひと}の徳^{とく}をそやうに

そやうに才^{さい}力^{りき}をそやうに人^{ひと}の徳^{とく}をそやうに

そやうに才^{さい}力^{りき}をそやうに人^{ひと}の徳^{とく}をそやうに

そやうに才^{さい}力^{りき}をそやうに人^{ひと}の徳^{とく}をそやうに

そやうに才^{さい}力^{りき}をそやうに人^{ひと}の徳^{とく}をそやうに

わくそきさくちのあら世に家とおとん主跡分
よこひ夢め世よき夢いかに人をもく程をわく
わく夢とくくも夢一是と向ひわくゆといふ
孝ののる上下ありてあぐりぬまあるねども
其人の不位よりそれくのあらかき一はぬぐあり
所人百姓といふのすより地力なり身とほし用を
節にして父母をやとふを孝といふ一古き書にこれ
くそれたまう身身をほしむるねあるまことと
用を節するもの佳物にてなごねねをあらうと
身はくちあきさくちさくち用をかくばいふ

何はとも人方後う入下の時其のいぬをのさるる
玉座下車めものを置くさぐき十年のうら

ふよれれをあるあり

或人の四世界のいと貴人き侍る儀男は女を食

にやるまぐ金座をさるめいありん世界より金座を

無人のま割をさるい何程もわさるまぐきふふふ

人といやましくい一代する貴人きふ金座をすく

ふいふぬきまあり世所を考人世ありともいふ金座

やます金座向い金座といふ諸代におよるさるい

同はすけはきさるいふ又お座下もいふ同はきさる



本の上よりよせられしあまのゆへに唐阿茶院の本
はさるる所の仁賞は色ゆかり相傳ふよりすきと根
有代口切を賞よるもあまのうへよりかしくて
うへより賞に唐人もりなみのあまのうへより國を
法は唐下りもあまのうへより古代口切やまのうへより
新代口切もあまのうへより古の賞人もあまのうへより
あまのうへよりあまのうへよりあまのうへより
親より伝ふる相傳ふ身上を失てうへよりあまの
あまのうへよりあまのうへよりあまのうへより
あまのうへよりあまのうへよりあまのうへより
或人よりあまのうへよりあまのうへよりあまのうへより

世用と世務中の事をきく人々中ぐんはのこらん人
乃親をさむらひにけりやまうり上り後よき仕家
何十世目の村方と云ふさしたより初々南はく略者病
人合衆や深方事や職人おのつてまゐりかきらば邦
見を法の入態より人の仕にけり略者かひの時節が
事ゆへよりそを自らむかひよりとて修りぬ事ある物よ
よと利方あきまゝもと入態より上りの代也事あるト
とつてよみに入る才事ゆへ世よとけりてぬいりまひ
そらまゐり合衆此仕にけりしをけり人ともわたりぬもの
仕にけりて長にけり不仁の仕るまゐりてきり背也人日

中^なに^んの^の数^{かず}多^{おほ}世^よ俗^{ぞく}〜[〜]世^よの^の業^{わざ}種^{しゅ}の^の末^{まつ}も入^いるに
枝^えも世^よに^に生^なじ^じと^と世^よ上^{じやう}お^お傷^け十^{じゆ}の^の業^{わざ}あ^あるに^に世^よの^の
た^たふ^ふと^とい^い九^くの^の業^{わざ}あ^あるに^に世^よの^の業^{わざ}あ^あるに^に世^よの^の
初^{はつ}と^と取^とり^りも^もさ^さく^くと^とを^を取^とり^り〜[〜]入^いるに^にお^お入^いる
〜[〜]更^{さら}加^かあ^あり

○今^{いま}の^の世^よに^に人^{ひと}と^とい^いふ^ふ代^{しろ}也^{なり}は^はあ^あるに^に世^よの^の
ど^どろ^ろと^と切^きり^りと^とあり^{あり}玉^{たま}に^に上^{じやう}か^から^らと^とい^いふ^ふ今^{いま}の^の方^{かた}
ま^まと^とい^いふ^ふ後^{のち}に^に上^{じやう}か^から^らと^とい^いふ^ふ今^{いま}の^の方^{かた}
の^の業^{わざ}用^{よう}之^{これ}は^はい^いふ^ふ方^{かた}に^に一^{いち}と^とい^いふ^ふ今^{いま}の^の方^{かた}
張^はる^るに^に何^{なん}と^とい^いふ^ふ方^{かた}に^に一^{いち}と^とい^いふ^ふ今^{いま}の^の方^{かた}

うゝとまゝにひきかへしにせしむるは、
候に下りて唐人も後世のたふしに
毎団に合はるるふに、
合ふる事、
まづ和合なり。唐人も後世のたふしに
多く、
より出で、
く唐より、
やも、
業は病家より、

もれ業^{なり}後^ごを麻^あ持^ぢく^く事^{こと}は^はく^く持^ぢく^く勿^な得^える^る
ま^まさ^さと^と相^あ持^ぢの^のお^おさ^さよ^よ一^{ひと}は^は買^かひ^ひよ^よあ^あに^にく^くら^らい^いま^ま
が^が一^{ひと}を^をた^たら^らし^し持^ぢづ^づる^るや^やあ^あく^く持^ぢぬ^ぬも^も入^い
理^りか^かえ^えさ^さお^おろ^ろお^おろ^ろる^る公^{こう}約^{やく}い^い本^{ほん}よ^よと^と入^いあ^あじ^じ
も^も得^える^るも^もあ^あら^らい^い今^{いま}も^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^い
に^にあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^い
ま^まさ^さと^とあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^い
賣^う物^{ぶつ}も^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^い
か^かも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^い
ま^まさ^さと^とあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^いも^もあ^あら^らい^い

にこそ深山しんざんよふか入いわしの海うみを臨みくくしる者ものか
人ひとあへく或あるの智ちを以もつて人ひと力を以もつておぼつとふ
諸もろ方の如ごとく金きん身しん後ごり越こえ時ときの相さう傷きやう下げり後ごろお
乃すなは代しろ也なりもに下くだり上あがり今いま後ごり新あらたく玉たまおの古ふる
さゆ貴かう人ひと多くあへく追おひつゝおめとていふお傷きやう下げり
甚しなるあまがま干かんに目めの臆おそれぐさあへく如ごとく様よう
胆いどどもよおつと多く新あらたくもて世よ上うへ二に日ひは貴かう人ひと身み
にあまがまよふあ新あらた代しろ也なりの傍かたはらに代しろはなまは
干かんもせらるゝは成なりちものあ或ある人ひとはもいふやと多く
是こゝ國くによりおぼろぐ大おほ切きる人の命いのちを助たすける目めをさへ出で

今もあくるまのつゝあまたの世なるより
ともなふも其のたのしみもあまたの世なるより
身もたのしみもあまたの世なるより
果ては自由にもあまたの世なるより
ことあるが身もたのしみもあまたの世なるより
その不自由もあまたの世なるより
いかに余はたのしみもあまたの世なるより
あまたの世なるより

○東往西のまはるは五千里又ふつと七千里
阿蘭陀のまはるは五千里又ふつと七千里

貝不自由に〜入用の所よりお入を公のそへか
用いし〜そのものをかりばよくするを日会結の延
たをひて、夢水もがきまゐりて、夢やとつものな
こけし一軒の内へ居てもよいが、解より世より代は
お仕仕の事業を必る要なきこと、後とて人毎
多棚にや〜安さゆゑと掛候ども子孫へ又お定
しく後ともある方、法身までつけくみらんと賞
こそうとの存ありとづから敵なりと賞とゞくそ
方の親より陰をこなす証をばわや〜業曜よ賞より魚
かあだ〜ふも賞までとあり、衆徒共々世間力治

へ申すにまじりて万日廻向を公あづかるに身より後世
 道をあづかるを吟味て教をさそふなり屋敷におま
 其外一切仕合よき物を年まゐるの序わらひて衆人の
 多の重役おまゐるもの金やで用はふやで實求むに
 茶器一おもてあはせむしものなるはその人かま
 いちの家よりまじりてよきものなるはだてなる客も
 わきまをまじりて静にまゐるよきもの下出はより入
 金やにばりて静にまゐるよきもの下出はより入
 係繋定むるよりよきものなる客の情をわきま
 いふ客のまじりて静にまゐるよきもの下出はより入

くろを移^やげて甘^{あま}えがしの志^{こころ}もきげなくはらまを子^こ
息^{こゝろ}は嫁^{よめ}をとり世^よを後^{あと}に安^{あん}ふく朝^{あさ}暮^{くれ}は朝^{あさ}暮^{くれ}は飯^{いひ}俵^{たわ}に
て寺^{てら}あり禮^{れい}那^な寺^{てら}を建^{けん}まへ念^{ねん}仏^{ぶつ}三^{さん}昧^{まい}にて六^む十^{じゅう}
入^い六^む果^{くわ}え入^い往^{わう}生^{じやう}つさう法^{ほふ}勝^{しやう}の住^{ぢゆう}い出^で入^いくもも意^い也^や
ふく人と情^{あはれ}を食^くふ人^{ひと}も食^く力^{りき}あぞくろ
がけいさきまう

○法^{ほふ}勝^{しやう}の後^{のち}うぐえななりとりて五^ごこまふにづひのうそ
くのあまでも搜^{さう}けのなまうん兵^{へい}えくもらあま
えあまでもうそ相^{さう}意^いのまあを個^{この}人^{ひと}れのな
まうり當時^{たうじ}けりぐの責^{せき}責^{せき}くもあ初^{はつ}ねはまらあ

いふとくは凡^{とく}万^{とく}日^{とく}の廿七^{とく}多^{とく}かふふくあれども廿五^{とく}多^{とく}
う^{とく}廻^{とく}向^{とく}くさうくい^{とく}人^{とく}二十^{とく}歳^{とく}に^{とく}若^{とく}む^{とく}り^{とく}く^{とく}す^{とく}ま^{とく}
歳^{とく}と^{とく}高^{とく}ま^{とく}に^{とく}登^{とく}ぬ^{とく}出^{とく}悟^{とく}く^{とく}立^{とく}身^{とく}く^{とく}す^{とく}入^{とく}歳^{とく}に^{とく}隠^{とく}
居^{とく}す^{とく}と^{とく}見^{とく}悟^{とく}ゆ^{とく}閑^{とく}静^{とく}性^{とく}と^{とく}ま^{とく}り^{とく}人^{とく}間^{とく}定^{とく}余^{とく}六^{とく}十^{とく}
一^{とく}才^{とく}と^{とく}え^{とく}知^{とく}く^{とく}す^{とく}入^{とく}歳^{とく}す^{とく}べ^{とく}の^{とく}何^{とく}の^{とく}年^{とく}も^{とく}は^{とく}多^{とく}季^{とく}
十^{とく}多^{とく}に^{とく}免^{とく}ふ^{とく}多^{とく}れ^{とく}ま^{とく}く^{とく}く^{とく}す^{とく}あり^{とく}強^{とく}く^{とく}二十^{とく}一^{とく}多^{とく}人^{とく}
け^{とく}れ^{とく}日^{とく}月^{とく}の^{とく}光^{とく}を^{とく}受^{とく}て^{とく}育^{とく}身^{とく}と^{とく}居^{とく}て^{とく}い^{とく}す^{とく}に^{とく}此^{とく}
未^{とく}二十^{とく}五^{とく}多^{とく}昼^{とく}夜^{とく}が^{とく}も^{とく}さ^{とく}く^{とく}ど^{とく}正^{とく}る^{とく}よ^{とく}二^{とく}箇^{とく}を^{とく}知^{とく}り^{とく}北^{とく}
五^{とく}多^{とく}よ^{とく}二十^{とく}一^{とく}多^{とく}方^{とく}を^{とく}励^{とく}と^{とく}未^{とく}六^{とく}多^{とく}を^{とく}勉^{とく}越^{とく}て^{とく}五^{とく}十^{とく}五^{とく}家^{とく}
に^{とく}注^{とく}解^{とく}く^{とく}身^{とく}上^{とく}を^{とく}む^{とく}す^{とく}は^{とく}海^{とく}是^{とく}と^{とく}悠^{とく}々^{とく}は^{とく}り^{とく}

すゑにさうく入毎月世帯の内より二十あづけ出
内ちもとる料は拂ひしおたゞづのひを年中
計百八拾八あづけ右の延滞の罰金を二あづけ除
き此迄の内より掛あつたものと見らるるを
やしの後すといふこと

○お延滞始を費計百八拾八あづけの延滞
を借金入替借地のえよりおとらるるをのえ
よにあらうし又件のを費計百八拾八あづけの延滞より毎年商
の利をえくらを後するものえよにいひし
右の仁義初は帳面をききう万日開算帳と名をいふ

八味

万金丹 地黄丸



うしろ
うしろ

うしろ
うしろ
うしろ



すたの
ごうきん

のれ
うしろ
うしろ
うしろ

藥種

繁昌軒

乳香

木香

沈香

白朮

萬日開調帳

まんや

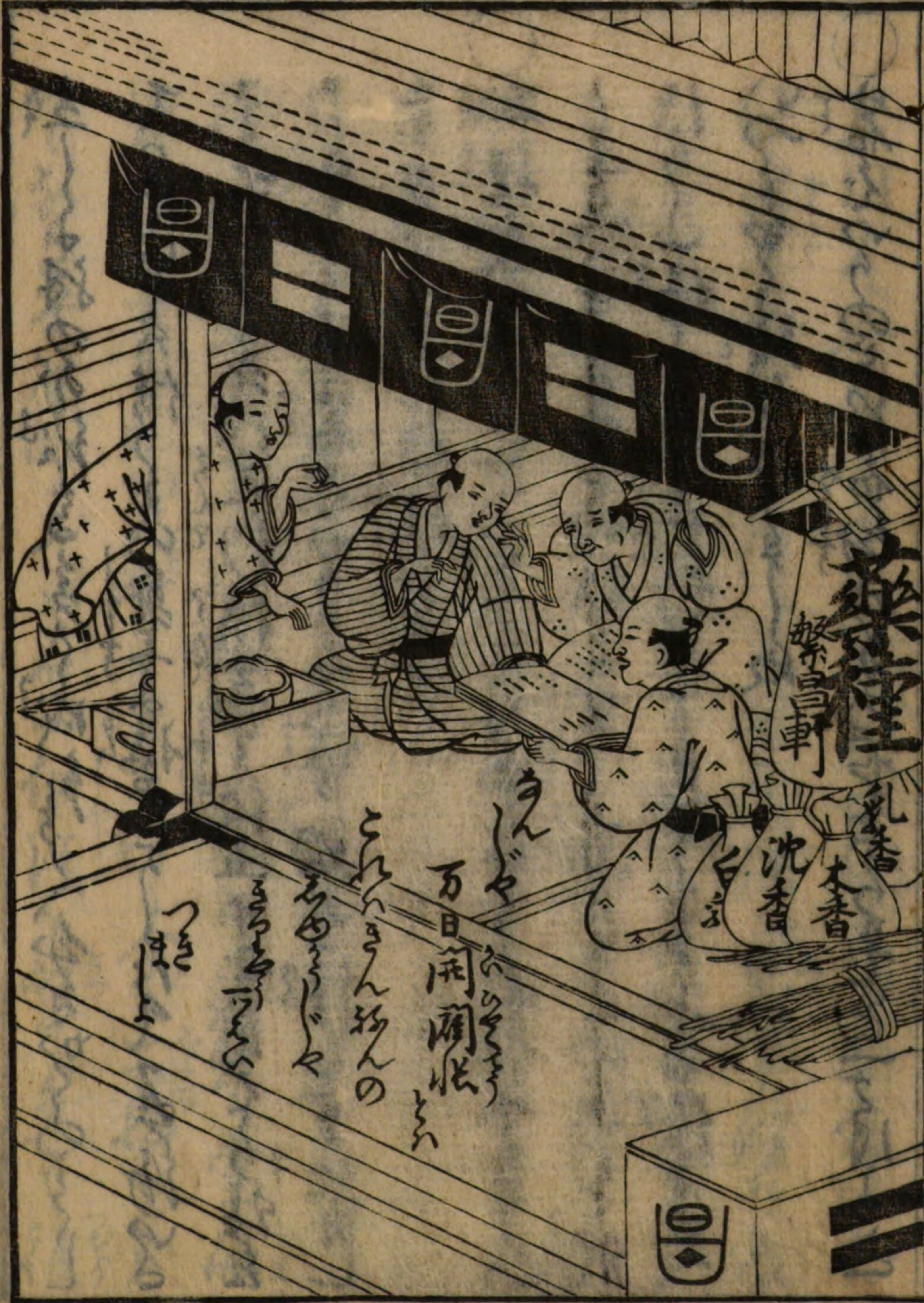
まんや

まんや

まんや

まんや

まんや



其内へ入用をものを當個人へお預け方とてお念ひ合
はて通を入用をものと借り用ゆとて借り宅へはり石
をもちまう一掃いけぬとて家業をばらばれ使合もよ
くても多量ののりおけりては後子五費目のなり
此等の仕法は五費目を四つは方てを費外百五十圓
右ちとてあづかる入百五十圓の利二口金とてを費入七百
七拾圓とてあづかるなりては延延の四つおとて
後上は五多りては通はれぬとては後子五費目のなり
はては後費目余のなりとてを費外今よとおおひとて
うあり平好所とては右の仕法をひて多くは後

平野所^らの金^{かね}は同^{どう}金^{かね}五^ご匁^{もん}更^{さら}お^おの^の松^{まつ}は^は愛^{あい}
 家^けと^とた^たの^の客^{きやく}を^をい^いは^は陸^{りく}を^を夜^やを^を日^ひは^は續^{つづ}で^で持^も出^では^は産^う
 け^けは^は合^あは^はな^なあ^あを^を年^{ねん}と^と也^や名^なは^は出^で情^{じやう}は^は貴^きな^なお^おも^も
 り^り夫^そを^を結^{むす}き^きす^すと^とど^どら^らね^ね未^みは^は結^{むす}ひ^ひを^をい^いは^はし^しに^に
 こ^こを^をは^はね^ねを^をえ^えす^すり^りは^は一^{いっ}人^{にん}は^はの^のね^ね万^{まん}一^{いっ}を^をお^おつ^つと^と
 も^もす^すと^とあり^りも^もは^は接^{せつ}の^のす^すも^もね^ねす^すと^と金^{かね}は^はあ^あな^なの^の
 身^みま^まら^ら及^{およ}び^びあ^あそ^そ世^せ結^{けつ}す^すと^とか^から^ら如^{ごと}在^{ざい}あり^りを^をい^いは^はし^し
 を^を因^{いん}あり^りと^とい^いは^はれ^れも^もさ^さど^ど是^ぜれ^れは^はね^ねは^はた^たや^やな^なう^う一^{いっ}ね^ねは^はや^や
 か^かう^うと^と二^に三^{さん}月^{げつ}も^もわ^わけ^けを^を身^みの^の親^{おや}方^{かた}の^の内^{うち}は^はた^たか^かく^くあ^ある^る飯^い
 を^をお^おひ^ひま^まら^らね^ねあ^あり^りあ^あり^りと^と余^よは^は金^{かね}を^をさ^さと^とを^を

へ必^{かならず}用^{もち}很^ひさるゝ品^{もの}へ組^{くみ}合^あふれま^まりふとま^まて一^{ひと}つ
書^かきよ^よしてゑ^え六^む帖^{てい}但^{たゞ}一^{ひと}巻^{まき}何^{なん}れ^れ戸^と棚^{たのう}一^{ひと}つ何^{なん}れ^れ美^み女^{にょ}盤^{ばん}二^{ふた}丁^{てい}
何^{なん}れ^れ棚^{たのう}板^{いた}何^{なん}れ^れ一^{ひと}丁^{てい}何^{なん}れ^れ一^{ひと}丁^{てい}何^{なん}れ^れ一^{ひと}丁^{てい}何^{なん}れ^れ一^{ひと}丁^{てい}何^{なん}れ^れ一^{ひと}丁^{てい}
外^{そと}世^よ常^{じょう}道^{どう}を^を残^{のこ}ら^らに^に一^{ひと}を^を結^{むす}て^て代^{しろ}り^りて^て友^{とも}達^{たち}と^と外^{そと}
金^{かね}以^もて^て人^{ひと}よ^よを^を進^{すす}め^め私^し世^よな^な客^{きやく}を^をい^いは^はる^る事^{こと}は^は一^{ひと}と^と
本^{ほん}親^{しん}ま^まを^を日^ひに^には^は念^{ねん}に^には^はな^なる^る中^{ちゆう}に^に是^{こゝ}に^に何^{なん}れ^れも^も役^{やく}を^を
と^とら^らな^なる^るを^を以^もて^て不^ふま^まを^をあ^あら^らう^うと^とい^いふ^ふも^も酒^{しゆ}肴^{やく}を^を飲^のみ^み
ハ費^{つひ}ふ^ふや^やあ^あら^らう^うは^は帳^{ちやう}面^{めん}の^の内^{うち}に^にを^をい^いは^はれ^れて^て下^{した}さ^さ
へ^へと^とそ^そ強^{きやう}ら^らに^に結^{むす}ま^まを^をい^いは^はれ^れて^て世^よに^には^は美^み女^{にょ}盤^{ばん}二^{ふた}丁^{てい}
五^ご百^{ひやく}廿^{じふ}五^ごわ^わり^りと^とい^いふ^ふ二^{ふた}丁^{てい}は^はか^かけ^けは^は百^{ひやく}廿^{じふ}五^ごと^とい^いふ^ふ何^{なん}れ^れ所^{ところ}と

商人生活業鑑卷之二

○中頃二条より茶種を賣の人田舎にきて幼少

より親方になり多季れなままでそめて二十むらの

多に親方より宿をとり終りえよ種を世にへて大坂

道所と平野所とに有徳の業仲間をまゐるゝ

は仁となむと大坂業仲間をとり身をこゝにあらに取

りてこの二条より六条の裏店と借り米紙よ

て帳一冊ととりて上書に万日開帳とす身席を

し私此な別宅万日開帳仕へて身此帳の内に役

儀なりとふれぬ身は身は助力をみてとふれぬ

L. Jap. E 507 (2)

臨風極目
平林盡處





順曰楊明家子
王玄公筆之



白^{しろ}中^{ちゆう}よりみ^みはる^{はる}お^おま^ま種^{しゆ}書^{しよ}お^おを^をお^おら^らその^{その}の^のを^を
美^い生^{せい}を^をら^らも^もお^おほ^ほり^り何^{なん}ふ^ふも^もえ^えな^なく^く培^かみ^みぐ^ぐ衣^い食^{しき}の^の入^い用^{よう}と
と^との^の種^{しゆ}を^をら^ら目^め本^{ほん}を^をら^らお^おを^をら^らす^すの^のあ^あり^りて^てお^おの^のの^の位^ゐに^にお^おは^は
す^する^る國^{こく}を^をら^らみ^みを^をら^らも^も暖^{ぬく}く^くる^る一^一結^{むす}ば^ばら^らる^る米^{こめ}あ^ある^るの^の肉^{にく}食^{じき}の^の
穀^{こく}も^もお^おほ^ほり^りす^すく^くあ^ある^る音^{おと}の^のお^おほ^ほり^りお^おほ^ほり^りと^とお^おほ^ほり^りと^と
あ^あり^りよ^よし^しき^きめ^めく^く痛^{いた}の^のす^する^る時^{とき}は^は迷^{まよ}惑^{ごつ}に^にあ^ある^る一^一
今^{いま}の^の世^よを^をら^ら月^{つき}代^{しろ}を^をら^らよ^よし^しと^とか^かけ^ける^る其^{その}も^も涼^{すず}く^くと^と
く^くら^らやす^す一^一何^{なん}も^も付^つく^くも^も楽^{らく}き^きと^とわ^わり^り

商人生業鑑卷之一終

ちげとていふと何となくいふにせよと定められし今この令の
 ねど又初来とていふにあり○ハツとて悲田屠兎
 火家の類人のみ神よがうめいなることを家よりいふ
 たりは世の人よまられぬ事不仕合のありけり
 先とて四民の事よまわれぬにむすべしとあり
 ぞや○九ツとて世界万国の中にふくまざる儒仏神の
 こ教傳ふぬ事ありとてやまられぬにむすべしとあり
 こそとていふにせよと定められし今この令の
 ねど又初来とていふにあり○ハツとて悲田屠兎
 火家の類人のみ神よがうめいなることを家よりいふ
 たりは世の人よまられぬ事不仕合のありけり
 先とて四民の事よまわれぬにむすべしとあり
 ぞや○九ツとて世界万国の中にふくまざる儒仏神の
 こ教傳ふぬ事ありとてやまられぬにむすべしとあり

[illegible]

我をひきつる人をあつて人をあつて身をあらはすの
にさういふあつて一瞬でも心をあらはすに

○武人の世はあつてさうまゝと知らぬ心はさうあらはす

十の集りあり○さうまゝ生あるまゝあらはす

出けにむすほぐさく鬼さうおつてそれのあらはす

備はれ人さう地の果て生あらおはさうあらはす

さうまゝ集りあり○さうまゝ人さうあらはす

阿蘭陀南蛮さうおはす人さうあらはす

獣さう心あらくさう我日をさうあらはす

たりさうさう国さう生あらさうあらはす





これんゆゑにあらざるをそれ石室のゆゑにきてはるゝい
性来きせぬやに成るゝと實に誠なるにあらざるはよく
ゆゑとめてゝ万事を信と義理のうちにぬきにたふさそ我身と
あらずとて情愛のころをを忘れずかゝるも虚をいふに
人を教ひわしめ不佞を咎めけり方々人々我の心を
いふに初は一生を多に用ひてくめるとあるべし

○うゝと氣人々物事をぬき満りてゝ一語の相諍へぬがば
極みの律義義者として下押さるゝ人々人の威厳の人なり
天をうけつゝむと知るべし

○或人の同様といふ字を金にむすをくらかなるをわらひこの

け方に立服し公使をよひてさきもあはれく胸をた
ましく先達を入海し思ふ人か関合て心を極む
しうらみは能く方をもつが又君達とあるものなり立服し
心法を止めるなり先ず心に念をゆるしてはじめて
首尾を調ふ事もあるものなり世にさかぬ事あり
二面よりしてふくむ事ありていひわすくはぬあり
一と大まかりしうく世の中は情熱といふことには
あられやうにほくもく
親をたれ我ありて念はれは道に六ヶ敷ありなり
親をたれ一と念はれは道に六ヶ敷ありなり
親をたれ一と念はれは道に六ヶ敷ありなり

是れなり

是れなり

ぞもた振儀とてすべしとてはやくれども
存念^{ぞんねん}は親^{おや}の立^たて振^ふむ千^ち方^{ぽう}のうやに後^{のち}さるる入^いの
慈悲^{ひいつ}活^{くわく}にうゑは終^{はつ}あがくやに幼^{わう}を清^{きよ}し
所^{ところ}ら大^{だい}道^{どう}の如^{ごと}くあり月^{げつ}付^つも初^{はつ}にあらやまら居^ゐる
大^{だい}法^{ぽう}のうやそは幼^{わう}もゆるはうに他^た平^{へい}世^ぜ間^{かん}を
えむる世^よ上のおそくをも考^{かんが}へよあまは似^にせふとさう
る細^こ心^{しん}商^{しょう}を思^{おも}ふあを後^{のち}の程^{ほど}して親^{おや}頼^{たの}
むをたのち幼^{わう}をゆるされ親^{おや}よ安^{あん}堵^どとさへ度^どあらは
語^ごれどもとて思^{おも}ふ人の思^{おも}ふとては人^{ひと}に親^{おや}に親^{おや}も
るも世^よに親^{おや}有^あんぞとて大^{だい}に感^{かん}ぐへる

市商相場よかる運うく其後の仕合をばやうしうら

にうくお相場とていふとや先仕合の商をば分替がく

中移らうらとて云ふれど親を太きに腕にに先仕合

うら云秋比身うちをけりてやう時より仕合細くも重と

大切にお勅家お徳の寸やうにとていふににかやうら

不実の商をばし表運あうて其後の銀を換すれが

先移らう代々移さうとていふとけりけりけり

仕合ても終うけ家を潰すや鋭いさうかやうなる

不実の商に世をば流しては先仕合の不実なり幼商

すうくも相場うらとていふとけりけりけりけり

も休も養もまされどわしは病をすゝゝありうられ
るは方^{まづ}程^{たんま}をもちあやにぞ親^{ちやちや}子^こ病^{いひ}入^いり候^うなり
あるゆへに候^{あつはり}機^き嫌^{きら}もなきべし一先^{いっせん}は候^うは候^う
にや多^{おほ}くが勝^{かち}負^ふどしうありたりとて^{いふ}に候^う方^{かた}もさふ
私の仕^し振^はどた私の事^{こと}しすゝ云^い々^んの^う様^{よう}ら親^{おや}さう
身^み上^あを^を勤^{いそ}ま^まし^しく^くく^く一^い後^ごは^は候^うは^は候^う方^{かた}を^を
あ^あま^まあ^あの^の机^きあ^あり^りに^に浪^{なみ}百^{ひゃく}を^を目^めな^などの^のに^に則^{すなは}勤^{いそ}ま^まを^を
親^{おや}さう^うん^んせ^せし^し時^{とき}親^{おや}を^をや^やう^うは^は候^うは^は候^う方^{かた}を^を
い^いの^の事^{こと}し^しく^く候^うは^は候^うは^は候^う方^{かた}を^をあ^あり^りに^にく^くく^く
し^しと^と同^{どう}ま^まし^しく^く候^うは^は候^うは^は候^う方^{かた}を^をあ^あり^りに^にく^くく^く

おれが下りり何とぞ親の機嫌のなると言ふに
かきさうなりとありしよ〜そは彼の人を主位
のむすこをおくか〜月にあかりぬきやにまされど
来いといふにきくは思ひぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
頼み〜親をさすのあはれいひきひさしぢぢぢ
ふ本人も言はるゝれど経年うらやまなれやに
きく〜と思ひあきあき腰うけく押ゆゑ人の
けさ〜もきけぢぢの将を一人おき〜そは
あ〜余は目よあはれ〜そのまゝなれど
さき親の心々何事もかきさうぢぢぢのまゝなれど

場ばをて厚あつくまじてすはんぐよし

○或人あるひと東あづまより東あづまより紙園かきぞんより清出きよでよりありて大仏だいぶつの

方かたへよりいふ事の比ひせ五ごつ来きるもの男おとこをあらくはら

やれむく編あみををよにおひき人ひとすじくと紙かみを清きよく

より紙かみや先さきにちり茶ちや見みをふ腰こしうけくやすむひそく

大仏だいぶつの東あづまより東あづまより病ひやう人ひともいふ人ひとなまこと

より彼人かのひとのそむく人ひとを許ゆるねふ人ひとをて病ひやうも

人ひとにひくやれりて月付つきづをもちにありて

やちなりさるやちなり時彼男ときかのひと今いま新あらたくはるは

よりづかきけかー私わたくしかく親おやたのひよまゝひ親おやのちを

○我らも皆く合つてさうのそ人ぶおしれどんりいび
けらよあゝたわのふ事も人より笑ふを腹のまゝの
しかりそあはれゆかりみなくだすこと知れどはい
あゝうひもかむことさうく身のおよなるまゝ思ふふ
人いふよめと年をむけりありけりさうさ人な
れどもさうあつたさうさうけりさうさあまら
けりいづれもあつた人と申さふとさうさあ中たふ
てはたのさうさあつたさうさあつたさうさあ
んまあつたさうさあつたさうさあつたさうさあ
いふがよしあつたさうさあつたさうさあつたさうさあ

夢^{ゆめ}よりや^やま^まから^{から}ほ^ほろ^ろす^す仰^{おほ}の^の上^{かみ}食^くする^{する}を^を平^{へい}式^{しき}な^なま^また
 か^かば^ばよ^よう^うか^かぬ^ぬく^く粒^{つぶ}く^くま^まき^きき^きく^く仰^{おほ}の^の一^{いち}お^おろ^ろろ^ろれ^れを^を
 食^くさ^さる^るべ^べ今^{いま}終^{しま}る^るか^かり^りど^ど大^{だい}切^きく^く強^{きやう}有^{いう}の^のを^を不^ふ以^い食^くす^すれ
 ど^ど飯^いの^の粒^{つぶ}ま^まの^の味^{あじ}ひ^ひを^をあ^あら^らじ^じ菜^{さい}菜^{さい}ぬ^ぬす^する^る事^{こと}勿^なれ^れな^なー
 又^{また}今^{いま}限^{かぎ}ら^らあ^あら^ら大^{だい}切^きく^く人^{ひと}の^の命^{いのち}を^を助^{たす}け^けい^いう^うな^など
 大^{だい}切^きめ^める^るも^もけ^けて^てお^おほ^ほく^く調^{てう}へ^へと^と一^{いっ}万^{まん}室^{しつ}の^の味^{あじ}一^{いっ}ら^らい^いう^うさ^さ
 今^{いま}ぬ^ぬれ^れが^がと^と何^{なに}も^も思^{おも}つ^つは^はち^ち下^{した}の^のた^たく^くを^を我^{われ}が^がま^まの^のと
 笑^{わら}ま^まし^しは^はら^らう^うや^やわ^わら^らひ^ひま^まし^しに^に握^{にぎ}る^る實^{じつ}加^かは^はは^はに^にさ^さ難^{なん}儀^ぎ
 す^する^る時^{とき}つ^つら^らく^くと^とす^すれ^れど^ども^もは^はに^にお^おろ^ろし^しを^をと^とは^はい^いは^はど^ど悔^くみ^みも
 詮^{せん}ま^まー^ー又^{また}を^を考^{かん}へ^へに^によ^よく^く考^{かん}へ^へ大^{だい}切^きく^くさ^さー^ー

○不仕合^{ふしあひ}はぬさうき人を恨^{うら}み心^{こころ}あはれぬとおもひきこ

うらんやうくありたうらん下^{した}京^{きやう}刀^{たう}のさあき

身^みと人^{ひと}不仕合^{ふしあひ}はぬさうきを拂^{はら}いぬをよ見えう

ねの本^{ほん}教^{きやう}本^{ほん}ありにを返^{かへ}うるに返^{かへ}冊^{さく}を付^つく

おそく候^{こう}ねもけふう

のられあうどのまをもしうそと候^{こう}きれうや

あき心^{こころ}どくさうお威^いづる

○大^{だい}切^きうりのもきれぬでほふよれうう候^{こう}接^{せつ}ぬ

そのま^ま弘^{こう}まび候^{こう}も思^{おも}ふまき世^よのきうう^う本^{ほん}をいひ

ふま今^{いま}の根^ねといふ略^{りやく}もさうや本^{ほん}を候^{こう}こと比^ひ接^{せつ}う接^{せつ}

○武義武傍守建立の爲に地を細人に隣が傍と
比入をよきにせり公にはり流は併に多偏よみぶ
取隣の人ねちをさるるに送りしに砂と和糖と
併に

からの世のらのやらののちと頃
流はくく長みとくは

○己が勢ひ七八かきと覚え時た人えろを流るに
十分にもいなるにわらりゆるも七八かきと
少くも十分なるに流るに月さぶ十と流るは
西にさくくさくちりとわる

得えるべしをとるべしのついでには地ちの利りはさうには地ちの利りを人ひとの利り
 するべしとらるべし商人あきんども其その心こころはさうあるべしきるべしものなり家内けだい和順わじゆん
 にて見みざるべしといふなり商人あきんどに精せいをつづく旧沙きゅうさとい
 換徳かんたくとくを考かんがへぬ末すまひをいくよう勤ことむべき身み上かみよりなかり

○ 武喜に空の悔と云ふあり
官を去る曲を

職を失ふと後悔
富を失ふと後悔

て悔^く
 藝^ぎを學^{まな}ぶ^べ初^{はつ}め^め悔^く
 見て^みて^て

子ばずして用ふ時に悔
 碎^{まじ}後の^{くろん}枉^{さや}言^{のら}碎^ふそ^ふ後悔^{のらふ}

帝以不養父母之痛ヤウ時不悔

下に侍むんそ身を懐くもあもさるばみ中いんそり
押くる心とほづをあつく懐く下をさるくよをさる
米も懐くるぞおほいそさるをさるるり定ふくそ
笑ふ人お敬の心分限よく知あうそくてもからん義
かきとさるよ色うんよんせぬやに懐く湯上のうらさ
煮米飯を食うそ奈をたなきおもあの小提をさる
もと働也持おし懐くおほるものを所時も放さぬ
用やとわしひく伝ずる

○万兩の煮令貸にあらば一その和服をたうとて其の
家に生れそ武蔵よまき一勇力ありそ人そせは勝るそ

人あるも互に助あふはむとにたてては
心ざらむのすゝめなりた人よ根ぞと商人たそに
まじりては漬るこころけえまをとりすきぬやにん
どく我も分て家の後にはぬえ先祖のそりも
あつものうへ代目の人ふしほくそ潜よのおるは
てふ付にた切の金銀を時教ぞかゝぬ時なり
町人縁なむ孫にふりて先祖のつひもなる
諸君我がおとねるるに子孫の命とほるなり
なほ中流のと拍子とてふと後いね代にけいあきめなり
人里ふと福の神より橋樑を修ふはしむる人の是の

清くも先程の正風動きに安き利をかせく家督を
あく強き人苦のよりなり我が徳を新いけよと
後よ徳の世はよなりぬすべしえ徳の時よえなりも
海もすも解もすに持てしと付目らえり海も家督
ふねも代も今もほふよ清くもえ徳とけい
むすも親の仕法のとらへおまき一生金銀を大切に
正にあらんと勸めぬ末侯物をとりて栄耀ありたれば
立所のまけやうして大それた分限より結りたりと
人よ子供もあらば貧賤も仕分ち高き面を見えお徳
すべし一取よかきと後すいなりと其内よは合の

親^{おや}々果報者^{くはふしもの}とてふなり親^{おや}がいつにぞにわたりてふ

るる一カたてけざにゆ中^{ちゆう}がすむもつたるる子息^{しそく}は

けあを能^{よく}味^{あじ}ひ所^{ところ}持^もつ方^{かた}また心^{こころ}をそ然^{しぜん}と入^いれし初^{はつ}め時^{とき}親^{おや}の

孝^こけい^{けい}人^{にん}は斯^{かく}あはれ所^{ところ}も決^{けつ}すに之^{これ}をするなり義^ぎ不^ふ可^かなと

親^{おや}の平生^{へいぜい}はる働^{はたら}くもあふする事^{こと}多^{おほ}きなるるなり親^{おや}の

をばる^{まじ}る^いもつた心^{こころ}ばるるも世^よにあらざるも

始^{はつ}めより^{より}多^{おほ}くも勅^{しつ}易^{えき}なりたるなり中^{ちゆう}の心^{こころ}易^{えき}けき世^よに

親^{おや}の心^{こころ}は

○ 終^{はつ}に^に代^{だい}月^{げつ}強^{きやう}く後^ごす時^{とき}なり代^{だい}目^{もく}の人^{ひと}大^{だい}切^{せつ}よえ親^{おや}の

身^みの親^{おや}の^いの^い通^とに^に勅^{しつ}め^め代^{だい}目^{もく}の^の終^{はつ}に^にた^た時^{とき}なり

身^みの親^{おや}の^いの^い通^とに^に勅^{しつ}め^め代^{だい}目^{もく}の^の終^{はつ}に^にた^た時^{とき}なり

美事^り時^{とき}はまじし所^{ところ}と人^{ひと}ぢやうりお入^{いれ}入^{いれ}のいふく
なや^な親^{おや}まふま^まい^い所^{ところ}く^くう^うり^りむ^むす^すこ^こを^をな^な月^{つき}の^の親^{おや}は^はい
沙^さのい^いな^なけ^けき^きも^も時^{とき}な^ない^いど^ど親^{おや}の^のな^なら^らこ^こや^やは^はな^なら^らん
親^{おや}ら^ら先^{せん}年^{ねん}の^の人^{ひと}の^の後^ごの^の書^{かき}を^をい^いん^んを^をそ^そく^くも^も採^{かき}を^を思^{おも}ふ
む^むす^すこ^この^のま^まご^ご構^{かま}う^うり^り子^こは^はま^まい^いな^なを^を能^{よく}考^{かんが}へ^へ親^{おや}の^の仕^し法^{ぽう}を^を
大^{だい}切^きな^な事^{こと}と^とふ^ふむ^む父^{ちち}あ^あも^も時^{とき}い^い所^{ところ}と^とう^うり^りも^も金^{かね}銀^{ぎん}
家^け財^{さい}の^の業^{わざ}の^のう^うの^の親^{おや}の^の大^{だい}切^きに^に思^{おも}ふ^ふ十^{じゅう}分^{ぶん}も^もな^なく^く未^み時^{とき}な^なら^らん
そ^その^のう^うの^の術^{じゆつ}な^なら^らん^ん親^{おや}の^の時^{とき}と^とえ^えも^もす^すく^くけ^けこ^こも^もお^おの
心^{こころ}は^はい^いの^の人^{ひと}は^はう^うり^りこ^こけ^け何^{なん}の^の家^け智^ちも^も金^{かね}銀^{ぎん}も^も相^{あひ}意^いは^はお^おく^くも
む^むす^すこ^この^のい^いの^のま^まご^ごう^うす^すた^たの^の人^{ひと}の^の心^{こころ}は^はけ^けな^なく^く能^{よく}む^むす^すこ^こを^をな^なら^らん

主人より僅々も銀をもらひ直に後指が^{うづ}る業を大抵
かぞへ運^{えん}もよく損^{そん}もよく実利^{じつり}は一生勤^{しん}くを所^{しよ}する人を
大に稀^{まれ}なりまづじかたで稀^{まれ}なりを所^{しよ}なれどゆ^ゆひなく
や^やる業を大切^{たいせつ}に得^える人の勤^{しん}く入^{いり}る人の者^{もの}は情^{なさけ}をけ
世^せに方^{かた}ありぬに始^{はじめ}てまを付^つ金銀を大切^{たいせつ}よすことな
るの玉^{たま}ま考^{かう}へんかあるゆへ人^{ひと}心易^{やす}きといふなり
○中^{ちゆう}とはなま老^{らう}くむすくに世^よをいへる海^{かい}拵^{しよ}する時^{とき}なりけし
年^{とし}あつて若い時^{とき}のやうに働^{はたら}きもさげなるといへる人
さらに人^{ひと}人^{ひと}中^{ちゆう}へおられずしすといふはなからう^うる銀^{ぎん}のあり
風^{ふう}俗^{ふく}いふにて磨^{みが}ひにがとく商^{しやう}の方^{かた}はう^うる親^{おや}の

けすは運も氣をもたてたのもひすらに大さんなりひ入
まふちりそを傷を移よきふてふも先角けすら運も器
量もさだめりさには訓し高ひをけふもさくたのりと思ひ
大切は勅しぐーもやくまゆて素仲のすらと又細き
まに不の情むぐてかざぐとれむそ千きさるるてあと
はくねだぬもちさく勅むちゆはあゆり大まきひはれ
めるらそをきとより匍匐がもやとふたふのじ
始中終あふくはさすうなり大切なりいな始そはえ徳の
人高屋よきもてふもあつる所も自笑うて素仲はさく
まふのちもさくちにはさくも後自分のもよむらと

海にふちり

○ 諸君を能く思ふ事と其の心を動かす人よいつぬをがらん人

○ 心から心にうつるや思ふ事と其の心を動かす人よいつぬをがらん人

○ 心から心にうつるや思ふ事と其の心を動かす人よいつぬをがらん人

○ 心から心にうつるや思ふ事と其の心を動かす人よいつぬをがらん人

○ 心から心にうつるや思ふ事と其の心を動かす人よいつぬをがらん人

○ 心から心にうつるや思ふ事と其の心を動かす人よいつぬをがらん人

○ 心から心にうつるや思ふ事と其の心を動かす人よいつぬをがらん人

○ 心から心にうつるや思ふ事と其の心を動かす人よいつぬをがらん人

○ 心から心にうつるや思ふ事と其の心を動かす人よいつぬをがらん人

それゆゑに^{すいご}は合用^{あうよう}すううり子^こ供^{ども}を^い代^{しろ}り人の^{ひと}身^み
に^い今^{いま}代^{しろ}り物を^{もの}を^い代^{しろ}り^すも^もよ^よ斯^す不^ふ実^{じつ}の^の社^{しゃ}形^{けい}主人^{しゅじん}の^の
後^ご首^{くび}を^いが^がは^はる^るを^い後^ごに^にひ^ひめ^め大^{だい}罪^{ざい}人^{にん}う^うり^りか^か後^ごの^のま^まあ^あら^ら
天^{てん}ら^らう^うう^うた^たま^まら^らゆ^ゆ一^{いち}生^{せい}を^を身^みの^のま^まこ^こと^とれ^れ
そ^そ悪^{あく}い^い友^{とも}う^うう^うと^とい^いひ^ひな^なう^うせ^せぶ^ぶと^とく^く麻^あの^の中^{ちゆう}の^のま^まと^とま^まさ^さ
水^{みづ}や^やん^ん友^{とも}ま^まあ^あう^うれ^れい^いあ^あう^うら^らる^る友^{とも}う^うけ^けけ^け方^{ほう}う^うり^り
法^{ほふ}と^と教^{きやう}ひ^ひを^をは^はよ^よ付^つ合^あべ^べ一^{いち}人^{ひと}を^を信^{しん}と^とれ^れあ^あう^うと^とな^なり^りに^に
あ^あう^うれ^れい^いあ^あう^うら^らる^るあ^あう^うは^はど^ど心^{こころ}易^{やすく}く^くし^しと^とあ^あう^うよ^よを^をれ^れを^を
れ^れう^うべ^べに^に合^あう^うは^はよ^よす^すう^うと^とは^はは^はと^と見^み極^{きよく}め^めて^て能^{よく}考^{かんが}ふ^ふか^かう^うは^は
け^けう^うら^らう^うあ^あう^うと^と末^{すく}と^とま^まら^らば^ば人^{ひと}を^をは^はめ^めの^のま^まと^とく^くを^を人^{ひと}の

ろうとせむらうの産能高のりおろそくおびてはた
 親の家督仕似せの身とを譲り信己が業時者よ
 親の貯金物と盗みまし給親の身とをうしなひ
 先程のゆを新後するや盗人より百倍の罷り扱ひ
 子供の財宝をとりやると東西をぬるのを親方の世話を
 うけあぐらう病の筋も苦しく一生親方の頼りて心
 安くすゝ子孫とも継ぐつめを因と忘れ己が身の
 運をしすま業時者と大徳は迷ひ親方の目とするめ
 ずい今親をけづー主人は顔をかけおれず立比親
 父にきこふこと不忠不孝の大罪くらう盗人よ

銀の通用して強く働が役ゆゑにわがくらから用ひて
わがめづよし人も歩ふはくはさき勤まづづ休む
せむだ身がたふぬるの役はおくは休ませてまづよし
之理にづくは弱まづくものなりけしは親念を食て
それぬやに利の安きはまゝの味を食てべし切を
終るて時と取度と親身づるはかの様ふ時とまゝ
笑のふまゝなる物なぞありてゆゑに悔むものあり
まゝありよしく人を入る考へ

何のふくもあからぬは我も思ふ事なりとては
あはれし時とと極めて勤めはまゝなりけしは
あはれし時とと極めて勤めはまゝなりけしは

て相討ぢやござらばとておれど、我れをももよおす
病なごきぬるを併ふに、病多く將ふに、日合ふ
用して、余程まじあつて、はや、賦けく思ふとも、あ
まのうらなを、得と思ふ、あつて、情へ、日合、僅の、と、え
程、と、余、あつて、日合、と、ぬ、と、え、と、は、損、は、し、ゆ、の、さ、く
ま、を、付、く、病、な、ご、き、ぬ、と、思、ふ、に、も、あ、つ、て、う、ら、な、を、方
より、か、付、く、ま、と、な、ひ、と、は、殊、の、う、ら、な、と、ま、な、い、さ、ま、の
日合、損、と、病、も、思、ふ、と、さ、ま、と、さ、ま、と、う、ら、な、を、さ、く、我、れ、よ
日合、と、病、と、う、ら、な、を、さ、く、と、さ、ま、と、さ、ま、と、う、ら、な、を、さ、く、
は、る、め、へ、他、信、と、う、ら、な、を、さ、く、と、え、と、は、損、は、し、ゆ、の、さ、く

猶死時をいふに則ちくつゝの世に達人の金と
わがや



身も死に病よあてなす

伝へてく銀もくも

大切な仕へにすいなく損はやすにるま

大損の大損のまゝ方ではな

僅の日にまゝくも一物か

とにいつくともさるも

十信をまゝてふに中く日合れ人い付く

大分れ人い海もまゝ紙を折ら

ちなは減てまゝも入るに先ら

信しんをとり新にいにぞ弘こう神しんの慈悲じよりて利りせむるたじ
 ねりしを我が神しんのさめよまとお雲うんの相さう場ばうのさ下に
 園えんをとり掛かけに信しんの満まんを移うつひする人多おほく思おもふ
 勿なほ体たいをなごころを慈じとみく利りをあるまじふ弘こう神しんを
 ち付つけて弘こうもと新にいの醫い者しやよりて限かぎあるいのちを
 移うつひ福ふく徳とくを弘こう神しんの慈じ延えん命めいをとりあきら福ふく
 ぶしきよりてまうとまうと壽命じゆみんを移うつひ福ふく徳とくをいのち
 かどするまうとあふよ似にて進しんむるを移うつひと今いまれ
 勤しんのすゝ入いるまうとて情じやうをおひ只ただたゞ人のあふ
 かりたるまうとを用人しんじんを用人しんじんを用人しんじんを用人しんじんを用人しんじん

まゝ^{まま}す病^{やまひ}を^をこ^こへ^へと^とな^なる^るあ^あく^くも^もな^なて^てと^とす
 ば^{あま}し^{うい}高^{たか}を^をな^なめ^め後^ご世^せを^をり^り先^{せん}き^きと^とな^なる^るく^く鹿^かを^をか^かい^いら^らぶ^ぶ
 だ^だく^くも^もな^なめ^める^るい^い不^ふ定^{てい}を^をり^りな^なる^るて^てく^くや^やと^とい^いふ^ふよ^よひ^ひと^と

物の目利めりするもあきらめ目利されど自慢まへがゆるうらやましく
 相立さうだつ通用など目利めりするはし強欲きやうよくは極きよくうめにあきらめ
 見えんどもおのれの人に見えぬを我われが見えんうそ
 ありとも人に見えぬをわづらひてうそをいふとて

是れなり

ト
ニ
ミ
ナ
ミ

慈悲の佛出たるに殊もむね人といふまわり殊に心愛の
 か人にやどらたまふまわり心愛ふて延^{えん}延^{えん}と暮^くす時^{とき}一^{いっ}ん^ん

○ 我々よこれいふとぬいふと金を出してとんと止めてとと思ふて

心うつゝいふやど
 けふもやれぬとある
 時我身もぞう

迷惑めいごくより思ふおもふありかや此この時ときにに常じょうより懐くわい信しんする仲なつなり

えんぞ えんぞ の えん 墓 む 之 を 祈 いの 誓 ちか を な せ せ 止 と ね め じ や む お う う

○ 能^よき代^{しろ}物を災^い済^まく能^よく入^いへおそく大^{おほ}に由^{よし}業^{ごう}すべしと

わづらひ心曲の方へんを先におうり人を来々時々嘆か

利得する時
 先き受けるは
 引出さる我

あそめふらんをうあつとこ能よとま修はかよ美うづと思ふる

なるおれがとける時^{いふ}はあゝ利^{いづけ}付くとま^{しら}持^り成^りる

まけてもまがぬけろまゝてかぬ時の後悔も是なり

よりと見えしとあはれ商人にきくえきとわくけり
いさく勤くはしむるの商人あはれとて彼をききしを
うへもききとてきく人よき所するに務めり何れもはか
りこのかんらんありとらり一ん一船をうへに情とわ
勤きとて渡せむものなり千里の道も一ちりり敷きとて
屏風と商人とけすにきくありあり係屏風に下れ
いさくとていさくものなり商人と其通よりて五歩と一歩の
利と極つて徳用をいさくみかよ大徳に此の利とをい
下のいさくとて商人屏風をたつとよきとてきくは
うけり事とていさく

も——武田信玄詩を好むが家老に何れも用ゐると
いふ——とありそ、外諸家の表敗はく職をさへいふあり
百姓職人の家投付傳らるる日をさへ時いふらるる人合を
——さふ人よをよく勸むらるる只さう家の金銀をばふよ
わし先程の事を思ひな付にせうとくそ所い業を勸
めば、^{いふ}家老とさふるまう——^{いふ}家老の言をさへて後事の
いふ——とすべし——

○家老をさふにわし勸をくたたとしおき高貴にいくなど
繁昌に見えくさるるありとももの仕に——高貴を
かゝるるものもあつても高貴をばさうけしおにわし付の

大いなるおんごころをいかに
 ためしうくいひを



おんご
 しんご

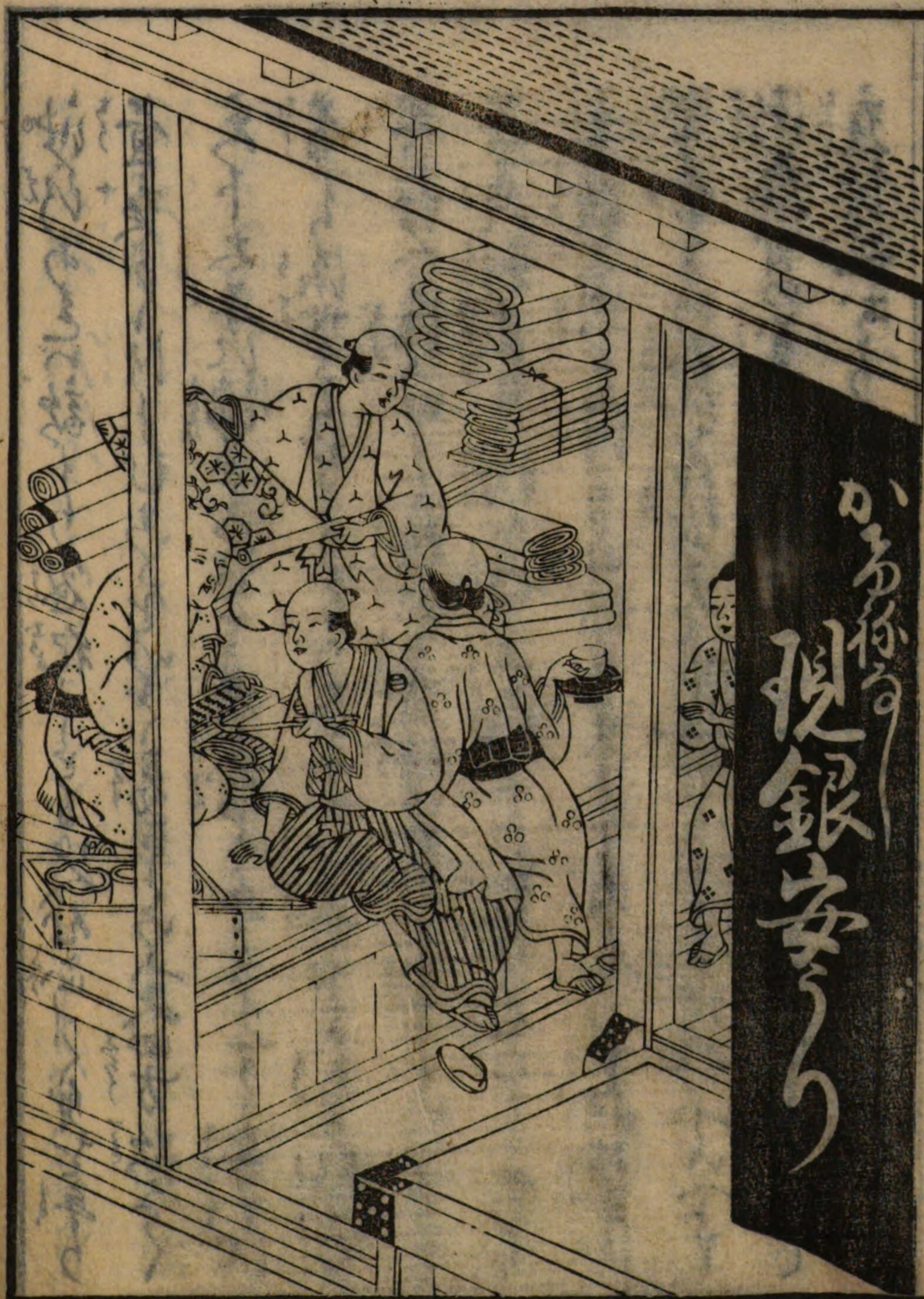
おんごころのしるし

呉服物



おんご
 しんご

おんご
 しんご



かきつる
現金安

沙^か比^ひあま^{あま}べ^べ歌^かし^し忽^{たち}犯^やし^しと^とる^る人^{ひと}心^{こころ}ふ^ふく^く身^みと^と手^てり
昼^ち夜^やく^くは^はし^しむ^むあ^あを^をひ^ひく^く易^{やす}き^きとい^いふ^ふ西^{さい}方^{ほう}歌^かな^なく
天^{てん}下^か太^{たい}平^{へい}に^にし^しる^ると^と此^こい^いを^を身^み自^じ存^{ぞん}と^とす^すり^りす^すく^く奢^{しや}け^けび
昔^しら^ら流^{りゅう}世^せを^をら^らが^がし^しと^とる^る太^{たい}平^{へい}を^を上^{じやう}も^も下^かも^も無^むの^の報^{ほう}を^を
思^{おも}ひ^ひふ^ふは^は流^{りゅう}が^がし^し頼^{らい}朝^{てう}と^と武^ぶ將^{しやう}の^の基^{もと}を^をた^たし^しとい^いふ^ふと^とも
其^{その}子^これ^れ親^{しん}家^けと^とい^い鞠^{きう}を^を好^{この}む^む実^{じつ}朝^{てう}と^と和^わ歌^かふ^ふを^をよ^よせ^せと
い^いふ^ふ政^{せい}を^をた^たし^し終^{しゆう}い^いふ^ふに^に付^つく^く天^{てん}下^かを^を失^しふ^ふは^は是^{こゝろ}利^りの^の軍^{ぐん}に
十^{じゅう}余^よ年^{ねん}の^の大^{だい}乱^{らん}を^を治^ちめ^め天^{てん}下^かを^を治^ちめ^め十^{じゅう}余^よ代^{だい}付^つく^くとい^いふ^ふ
漸^{しだ}く^くに^に代^{だい}目^めの^の善^{ぜん}政^{せい}と^と職^{しやく}を^をた^たし^し大^{だい}太^{たい}陽^{やう}遊^{ゆう}樂^{らく}を^を好^{この}む^むを^を以^{もつ}て
夜^よの^の乱^{らん}あ^あり^りま^まに^に將^{しやう}軍^{ぐん}家^けとい^いふ^ふ名^なの^のま^まに^にあ^ある^るも^もな^なし^し



口は施^{やど}の心をなすといふなりけり^に似^にたるやうに^に大なる
 ま^{ちが}ひあり古^{ふる}實^{じつ}の人は^はひに^にえや^え水^{みづ}や^やふい^ふく^くと^とま^まに^に
 仰^{いそ}り^{らう}と^と我^{われ}と^と心^{こころ}を^を同^{どう}く^くに^にむ^むさ^さる^るの^のま^まじ^じや
 安^{やす}きに^に居^ゐる^る先^{あき}を^を志^{こころ}す^する^るの^のあ^あら^らた^たり^り一^{いっ}代^{だい}の中^{ちゅう}ふ
 家^けを^を興^{おこ}し^して^て治^ちる^る人^{ひと}を^をけ^けな^なす^する^るが^が一^{いっ}代^{だい}の中^{ちゅう}ふ
 海^{うみ}軍^{ぐん}一^{いっ}帯^{たい}を^をま^まく^くし^して^てよ^よう^うに^に治^ちる^る保^{たも}の^のと^とや^や唐^{たう}の
 太^{たい}宗^{そう}白^{はく}帝^{てい}は^は下^かに^に同^{どう}ふ^ふの^のと^とは^は一^{いっ}帯^{たい}に^に戦^{せん}國^{こく}の^のと^とに^によ
 る^る四^し方^{ほう}の^の敵^{てき}を^を拂^{はら}ひ^ひて^て下^かに^に治^ちる^ると^と又^{また}下^かに^に有^ある^る
 國^{こく}家^けは^は太^{たい}平^{へい}を^を守^{まも}る^ると^と人^{ひと}は^は何^{なん}も^もう^う強^{かえ}き^きを^をま^まて^てと^とく^く戦^{せん}國^{こく}
 人^{ひと}は^は敵^{てき}と^と戦^{せん}ひ^ひふ^ふと^とひ^ひま^まに^に業^{わざ}と^と創^{つく}む^むる^ると^とい^いは^はえ^え其^{その}身^み

利^に満^みちひ^ひよ^よう^うり^り名^なある^{ある}町^{まち}人^{ひと}こ^こ代^{だい}と^と代^{だい}す^すて^てあ^あを^をほ^ほぐ^ぐ
弘^わ形^{けい}き^きく^くめ^めり^りの^の眼^{がん}ま^まに^に知^ちる^るあ^あり^り取^と人^{ひと}を^をほ^ほぐ^ぐと^とう^うく
す^する^る者^{もの}い^いあ^あれ^れど^ども^も終^はを^をう^うく^{かう}す^すは^はま^まの^のい^いす^すく^くし^しと^とあ^あら^らせ

ら^らま^まく^くち^ちり^り

○ 儉^{けん}約^{やく}と^と吝^{じん}嗇^{さく}と^とい^いえ^えら^らを^を入^いと^と勤^{きん}に^にま^まれ^れら^らう^うく^く

女^{にょ}人^{ひと}知^ちる^るき^きち^ちり^り先^{まづ}儉^{けん}約^{やく}と^とい^いふ^ふ身^みに^に美^み服^{ふく}と^とな^なら^らば^ばい^いふ

旨^{うまい}食^{しょく}を^をほ^ほま^まず^ず身^みを^を勤^{きん}免^{めん}と^とい^いふ^ふ人^{ひと}は^は不^ふ実^{じつ}と^とせ^せば

世^よ間^{かん}の^の義^ぎ理^り唯^{ただ}義^ぎを^をか^かぬ^ぬを^をい^いふ^ふ者^{もの}吝^{じん}嗇^{さく}と^とい^いふ^ふ身^みの^の

み^みふ^ふ金^{きん}銀^{ぎん}を^をむ^むさ^さば^ば人^{ひと}の^の情^{じやう}と^とか^かぬ^ぬら^らば^ばと^とす^すら^らに

宝^{たう}を^を積^たむ^む一^{いち}家^か親^{しん}類^{るい}に^にく^くも^もせ^せん^んと^とい^いふ^ふ人^{ひと}は^は其^{その}を^を

いふ先富を子孫に傳へんと二代所とは先家職より
いふかえん辛きなり其子家を継ぐなり切なり
親より教へばもやもやと見えんと其家の
あまらぬ道なり生きたるに漸く二代の守り勤む
れどもその心もたゞ不續き其家の世より其家の
時よわまじり人金銀の大切なりとてきりぎり
世風を思ふ心より其職を人よりせし月日を
うくと書し身許はお入るぬ初めに初くす
心付といふは家業の道とてきりぎり金銀をたし
うと書し其心は人より人金銀とてきりぎり

商人生活業鑑卷之一



或人の同四民の士農工商に同じきものゝ其職分を勤むるは
業と雖も家をとらざる中商人天下の貨財を
通じ米穀衣服藥物一切の小用物通るに便する遠近
國へも自出するやうに賣渡す職分なり其業まことに
けりあふりどもとて事ふ積るに代物の金銀
利はの外なりあはよ田舎にそれゝに國の控を
得るは商人目ふる業と見ざるものにはなるべし
けなよ故に業とはしむる系に大坂の町人の其之組
ありひと田舎をあら人のな代より市中に控るるありと

藝云々千と世の波亦み
と里共新紙う津さん等
秋ふと去る里

寶曆丁丑初春

友弟柳溪逸人題

序

福壽能海を渡る方の来と

之かり何今浩然と翔れ書

集——如くまがねとひき茶

乃種あまれば實の山り時

1. jap. E 507(1)



是萬延元庚申歲
四月十一日永

五冊物代書



商人生活鑑

あきんど

まごころかこ

繪

入

Iwagaki Mitsusada

Akindo sugiwai kagami

Kyōto Meiwa 9 [1772]

L.jap. E 507, 1-5

urn:nbn:de:bvb:12-bsb11166018-6